

も能く意を用ゐて其の徒然を消さんとする人は極はめて少なく、多くは益も無き談の方に流るゝことなるが、之れ身に取りては迷惑とする處なり」。

忠信、「それは實に憂ふべき事にて在るなり。あはれ此の世には人間の口と舌とを以て語るべき程の價值ある者在ることなく、唯だ天なる神の事をこそ語るべきなれ」。

多辯、「卿の云ふ處一々道理に適へば、我れは殊の外卿を悦ぶなり。げに神の事を語らんほど世に楽しく且つ有益なる者は無からん。人若し奥妙不思議なる事を悦びとせば、其の樂しきこと何にか比へん、例へば聖き經典の中に麗はしくも亦面白く書き記されたる、奇蹟や古き世の物語りや、又は不思議の神兆などを差し措きては、誰れか亦他に面白き世の不思議を見ることを得ん」。

忠信、「云はるゝ通りなり、されど斯かる事を語るにも、面白し樂

しと望むよりは、之れに依りて益せらるゝやう欲ふこそ、我等が志ざしともなすべきならぬ」。

多辯、「それは固より勿論なり、斯かる事を語るは最と有益にて、斯くしつゝ自づから多くの智識をも得ることなり。先づ浮世の虚なることや、天に屬ける物の愛でたきことを知り、總じては新らしき命の必要なること、人の行爲の不充分なること、キリストの正義を頼むべきことなどを細やかに悟り、また之れに依りて悔い改たむること、信すること、祈ること、苦しみを忍ぶことなどの趣意をも悟るべく、また其の身の喜悦とすべき、福音の盛んなる約束と其の慰藉の事をも悟り、猶ほ亦斯くする事によりて、僞はりの説を破り、真理を明らかにし、従つて知らぬ人を教へ導びくことなどを知るに至るべし」。

忠信、「一々云はるゝ通りなり、我れは卿より斯かる事を聞かざる

るを最と嬉しく思ふなり」。

多辯、「しかるに斯くすることの乏しき爲め、おのづから信仰の大切なることや、また限りなき生命を得るには、先づ其の靈魂に恩恵の働らきの無くて叶はぬことなどを悟る者少なく、唯だ其の甲斐なき律法の行爲を頼みとして、蒙昧に天國に達せんとする者多きに至る、あゝ嘆かばしきことならずや」。

忠信、「されど唯だ口にて語らねばとて、天の智識の得られぬと云ふこともあるまじ、元來神の賜物なれば、また人間の骨折にても得らるべきに非ずと思ふなり、失禮は容されよ」。

多辯、「そは凡て我が最と能く知るどころ、人は天より賜ふに非ざれば受くること能はざるなり、げに凡て恩恵に依りて行爲に依らず、其の他幾らにても我れは其の證言を聖書より引き得るなり」。

其時忠信は言葉を更ため、「さらば之れより何かひとつの主意を定

約翰三
七、二十
提摩多
九、一ノ

めて、互ひに語りては如何にぞや」。

多辯、「まことに我らの益となる事ならば、天の事にもあれ地の事にもあれ、道の事にもあれ教への事にもあれ、聖き事聖からざる事、過去の事未來の事、異邦の事我が國の事、あるは本躰、また末葉、およそ何事にまれ卿が望むまに、語るべし」。

忠信は之れを聞きて稍や心に驚ろきを催ふし、基督信者の（折しも連れを離れて獨り歩みける）方に進み寄りて、忍びやかに云ひけるやう、「いか様我れらは強勢なる道連れを得たり、此は定めし最と勝れたる旅人ならん」。

其時基督信者は靜かに微笑を含みて、「彼れが事を知らぬ人々は、多く此の者の舌先にて惑はさるゝなり、さては卿も爲てやられしなるべし」。

忠信、「さらば卿は彼の者を知らるゝや」。

基、「彼れを知れりや、固よりなり、彼れが身の上は彼れ自身より我れ能く知れる程なり」。

忠信、「さて、さらば何者なるにや」。

督、「されば其の名は多辯とて、我が郷の者なり、げに我が郷は随分廣きことも廣けれど、さりとて卿が彼の者に見知りなしとは不思議なりかし」。

忠信、「さて誰れがしの子息にて、何町の邊りに住みける者ぞや」。

基、「彼の者は口輕某がしの子にて空談通りに住みけり。まことや空談通りの多辯とて、其の名は界限に知れ渡れる者なり、されど其の口先の麗はしきには似も付かず、實は憫然なる者なり」。

忠信、「まかも彼れは最立派相に見ゆるならずや」。

基、「充分彼れを識らぬ者の目には其の通り見ゆることなり、そは彼れ外にては最立派なれど、内に在る時は全く見すばらし。げに

卿が彼れを立派相なりと云へるに付けて、思ひ浮べたる事こそあれ、我れ或る畫工の作を見たることありしが、遠くにては随分見事なりしも、近くに寄れば最とく醜悪かりしなり」。

忠信、「そは戲言なるべし、卿は斯く云ひつゝも笑らはるゝよ」。

基、「よし打ち笑みたればとて、此事こそは神かけて戲談にあらず、我身は亦謂はれも無く他人を誣ふことは爲ざるなり。猶ほ彼れの手を卿に明かすべし、抑も彼の者は如何なる仲間とにても、また如何なる場合にても宗教の事を口にするなり。今しも卿と語れる如く、矢張り居酒屋にても語るなり、まかも酒が廻れば廻はるほど斯かる事も益ます其の口より出づるなり。其の心にも其の家にも又其の行爲ひにも、絶えて宗教の道の置き處なければ、一切之れを舌の先きに置くなり。げに彼れは宗教の道を雑談の種とするなり」。

忠信、「かくも云はるゝか、さては我れ此の人にひと方ならず欺む

かれたり。

「基、」欺むかれたりどや、必らず左もあるべし、げに古諺にも「彼等は云ふのみにして行なはず」と云へり、されど神の國は言に在るに非ず能にあることを覺ゆべきなり。彼れは祈りのこと、悔い改めたること、信仰のこと、また新たに生るゝことなどに就きて語れども、唯だ語る斗りにて實は知らぬなり。我身は其の家に行きしこともあり、また内にて外にても彼れに目を注げしことあれば、我が云ふ處の違はぬを知るなり。其の家内には宗教の趣味と云ふもの更になく、宛ながら鶏卵の蛋白の無味なるに似たり。また祈りの影も無ければ、罪を悔ゆるの表章だになし、まことや獸類にても彼れがするよりは勝りて神に仕ふるなるべし。彼ゆるにこそ宗教の道は其の隣人の間に汚され誹られ又辱かしめらるゝなれ。また彼れが住める界限にても宗教の道の一と言も善く云はれぬは皆な彼れ故なり。

馬太二
三三
哥林多前
十四

羅馬二
三
二十

かゝれば彼れを知れる町人等は、彼れが事を「外聖人の内惡魔」と云ひはやし、家内の人々は亦其の能く云ひ適へるを知ることなり。げに彼れは極はめて薄情にて、家僕等を口ぎたなく叱り罵しり、また極はめて無理を張るにより、皆な全く持て餘して爲やう云ひやうも無き程なり。また此の多辯は出來得る限り他人を踏み付け、詐はり欺むき、又出し抜く事をする者なれば、一度彼れと何かの關はり合ひを爲せし人々は皆な云ふ、あゝ彼れと事を談らはんよりは神を知らぬ者の方却つて安全なり、げに不信者の手も彼れよりは迢かに正直なる仕打ちを爲すなりと。且つ亦彼れは其の子息等をも己れの隣に習らはせんと育つるなるが、斯くて彼等の中に馬鹿らしき臆病(こは彼れの云ふことにて實は優しき氣質)を顯はす者あれば、彼れは忽ち之れを馬鹿者又は鈍物と呼び、自身にも之れを用ゐぬのみか、人にも絶えて薦むることなし。我れ私かに思ふに、彼れは此の惡し

き行為に依りて多くの人を躓づかせ又倒せしなるべく、神若し制し給はずば猶ほ更に多くの者を滅ぼすに至るべし。

忠信、「あゝ兄弟よ、我れは卿の云はるゝ處に信を置くなり、そは唯だ卿が彼れを知ると云ふ故のみにもあらず、全く卿が一個の基督信者として人々の身の上を語らるればなり。卿が悪意を夾さみて斯かる事を語らるゝとも思はれず、此は正に卿の云ふ通りに相違あるまじ。

基、「我身とても卿ほども彼れが事を知らざりしならんには、多分卿が初めに思はれつるやう考へたりしなるべく、げにや亦宗教の敵たる人々より斯かる評判を聞きたりとせば、それこそ証言ならんとも思ひたるならめ、固より善人の名前と其の事業の上には、屢ば悪人の口より讒言の落ちかゝること世の常なり。されど今我が述べたる事ども、及び其の他我が知れる種々の事によりて、彼れの非道なるを證明し得るなり。且つ亦善き人々は皆な彼れを忌み憚かりて、同胞とも朋友とも呼ぶ者なく、げに彼れを知れる間柄にては其の名を云ふてさへ赤面する位なり。

忠信、「さては云ふ事と行なふ事との別者なるを、我れ今更らの如く合點せり、げに此の後ちには我身も能く意して其の區別を見定むべし。

基、「まことや此の二たつは全く別者にて、魂魄と身體との異なるにも比へつべし。されば魂魄なき體は唯だ死骸に過ぎざる如く、言ふととても、唯だ言ふ斗りならんには、亦之れ死骸に外ならず。宗教の道の最とも大切なる處は、實際行なふと云ふことなり。されば『神なる父の前に潔くして穢れなく仕ふることは、孤子と寡婦を其患難の中に眷顧ひ、また自から守りて世に汚されざる是れなり』とあるならずや。まかも此は多辯の思ひも寄らざる處にて、彼れは

●雅各一
二二、二十一
十七

唯だ聞くこと、言ふこと斗りにて善き基督信者となり得べしと考へ、かくて自身の心をも欺むくなり。聞くことは唯だ種を種きたるに等しく、さて其の種愈よ心と行動の上に實を結びたりと云ふども、唯だ言ふこと丈の證にては不充充分なり。げにや審判の日には人々皆なり。其の結すべし實に依りて裁判かるゝこと、我等とても確と心得べきなり。其の日に於ては、「汝信じたりや」とは問はるゝことなく、「汝行なひたりや、夫れとも唯だ言ふ斗りなりしや」と尋ねられ、其れに従がつて審判かるゝことなるべし。世の終焉は亦收穫に喩へらる、收穫にて人々の貴ぶ處は唯だ其の實のみなること云ふ迄も無し。我身が斯く語るは、信仰に依らざる者の、一とつとして神に受けられざることを云はんとに非ず、唯だ其の日到らば多辯の言分立たざるべきことを卿に示さんとしてなり。

忠信、「卿の云はるゝに付けて、我れモーセが潔き獸の事を記し、

馬太三ノ二十

利未記十申命記十

處を思ひ浮べたり。潔かるべき獸とは蹄の分かれたる又反嚼しする類ひの者なり、只に蹄の分かれたるのみにても、又只に反嚼ひのみにても其の類ひとはなさす。されば兎は反嚼むことはすれど、其の蹄分かれざるに依りて汚れたる者となせり。之れ實に多辯が上に似通へり、彼れは智識を求めて反嚼むことをなす、げに彼れは言を嚼み反へすことは爲れど、然かも罪人の道より分かれざれば、其の蹄は分かれざるなり。されば彼の兎と等しく、犬や熊の類ひの足を持ち、かくて彼れも亦汚れたる者なり。

基、「さても、卿は其の教への意義を又無く適切に云ひ盡されたり。我れも一とつの事を加はへんに、パウロは或る人々を呼びて、げにや亦斯かる口斗り達者の人共をも名付けて、鳴銅や響く鍍鉢なりと云へり。或る時は又靈なくして聲を出だす者とも呼べり、此の靈なき者とは、眞の信仰も無く、福音の恩恵をも有たぬ者にて、從

哥林多前十三ノ一、十三ノ七、十四ノ

がつて其の言ふ所は宛ながら天の使の聲や言葉に似たりとも、決して天國に入ることを得ず、乃はち靈ある小供等と共に住むことを得ざる者なり。

忠信、「我身は初め彼れに連れ立ちしを悦びしにも増して、今は却つて煩さく思ふなり。彼れを遠ざくるには如何にせば可からん。」

基、「我が云ふ事を聞き、我が卿に云ひ合むる通り爲て見られよ、若し神が其の心を動かし之れを返へし給はぬかぎりは、彼の者必ず心疾ましくなりて、おのづから卿と道連れを止むるに至るべし。」

忠信、「さて卿の爲よと云はるゝは何事ぞや。」

基、「さればなり、先づ彼れに行き、さて宗教の能力につきて何事か真面目なる談を始められよ、(彼れ必らず之れに乗るべければ) 宗教の能は盛んなる者なりなど讃めそやすなるべし、其時卿明からさまに、さらば汝の心と行爲と又其の家内の有様とに此の事の表はれ

居るや、如何に〜と尋ねて見られよ。」

忠信は之れを聞きて再び歩みを移し、さて多辯の方に進み行きて、「いかにや、恙もあらぬにや」と云ふ。

多辯、「これは〜、別に變はりもなし。唯だ卿早く來らば今までは澤山の談も爲べかりしをと思ひ居たる處なり。」

忠信、「さらば卿の意に任せ、今より直ちに始むべし。さて先きに何にても尋ね見よとの事なりしにより、我れ此の事を伺がふべし、抑も神の恩化が一度び人の心に及ぶ時は、如何なる態を現はすものにや。」

多辯、「さては物の能につきて語るべしと覺ゆ。其は最と善き問なれば、我れも喜びて卿に答ふべし、先づ手短かに之れを云は、第一に、其の心に神の恩化を蒙る場合には、其れが爲め激しく罪惡に向ひて哭き叫ぶに至るべし。第二に、

忠信、「いや、待たれよ。先づ一つの事に就きて直ちに考へて見るべし。我れ思ふに寧ろ其の恩化は人の心を傾むけて罪惡を憎むに至らしむと云ふべき筈なり」。

多辯、「罪惡を叫ぶと云ふと、また罪惡を憎むと云ふと、如何斗りの差異かあらん」。

忠信、「さて、大差あり。人は唯だ御方便に罪に向ひて哭き叫ぶことも出来るなり、されど其れを憎むことは正しく信心の嫌惡に依らでは爲し難し。我れ多くの人の罪惡を叫びつゝ、説教するを聞きたりしが、さらばとて其の家に就きて、其の心と其の行なひとを見るに、存外之れと仲良くなし居る者もありけり。昔しヨセフの主婦人が大聲に泣き叫びたる其の態は、げにも貞節正しきやうに在りつれども、實は其には似も付かず、其の意中にはヨセフと不義を行なはんと欲ひしなり。また或る人の罪惡に向ひて哭き叫ぶは、まこと

に母親が其の子を膝下に置きて泣き叫ぶに似たり、腐れ根性よ惡戯者よと云ひ罵しるかと思へば、やがて抱き上げて愛くしがなるなり」。

多辯、「卿は他の非を鳴らさんとせらるゝや」。

忠信、「いや、さることあらず、我身は唯だ筋道を正しくせんとするのみ。さて其の次は如何にや、げに其の心に恩化の働らきを受けたる第二の表章は何なるべき」。

多辯、「廣く福音の奧義を知ることなり」。

忠信、「此の表章こそ第一にあるべき筈ならずや。されど後にもあれ始めにもあれ、之れ亦謂はれなき事なり。そは其の心未だ神の恩澤に沾ほされずとも、随分福音の奧義を知り、また深く之れに達することとも出来るなり。されど人如何に凡ての事を知りたりとも、猶ほ數ふるに足らぬ者あり、かくて又神の子たるに適はざる者あり。昔しキリスト其の弟子達に向ひて、『爾曹すべて是等の事を知るや』、

と云はれし時、皆な然りと答へけるに、主は更に言葉を添へ、「爾曹之れを行なはば、福ひなり」と云ひ給へり。かく主は之れを行なふ者を祝せられしも、之れを知る者は福ひなりと云はれざりしなり、そは知ることにも行なひの伴なはざる者あり、かの「僕その主人の心を知れども準備せず又之れを行さず」と云へる類ひなり。また天使の如く能く知れども、而かも全く基督信者に非ざる人さへある事なれば、卿の云はるゝ此の表章は眞實ならず。げに、知ることは口先き斗りの輩儕を悦ばす者なり、されど神の悦び給ふ處は行なふことにあるなり。さりて其の心を善くするに智識は無用なりと云ふに非ず、そは智識なくば心も亦空しかるべきなり。さて智識と云ふに二たつあり、一つは唯だ物事の理を知るに止まる智識、今一とつは信仰と愛の徳を備へたる智識にて、之れこそ人を動かす、まことに其の心より神の聖旨を行はしむるなれ。前なる方は口斗り

の人々に相應しく、されど眞正の基督信者は皆な後なる方を望み、之れなくば片時も安んぜざる次第なり。「われに智慧を與へ給へ、さらば我れ汝の法を守り、心を盡して之れに従がはん」ともあるならずや」。

多辯、「又しても卿は我が非を鳴らさるゝよ、そは人の徳を建つることにもあるまじ」。

忠信、「さて其の次は如何にや、げに此の恩化の働らきある場合には、猶ほ他の表章もあるものにや、更に意見を聞かされよ」。

多辯、「いやなり。とても卿とは話が合はぬなり」。

忠信、「卿もし否とならば我身代はりて説かんは如何に」。

多辯、「そは卿の勝手なり」。

忠信、「抑も人の心にある恩化の働らきは、それを有てる人自からにも、また傍觀者の目にも表はるゝなり」。

馬可十
六、ノ、十
六、ノ、十
六、ノ、十
六、ノ、十
二、ノ、十
四、ノ、十

詩三十
八、ノ、十
八、ノ、十
三、ノ、十
三、ノ、十
耶利米
九、ノ、十
十、ノ、十
馬太五
六、ノ、十
六、ノ、十
使徒行
六、ノ、十
加拉太
一、ノ、十
加一、ノ、十
一、ノ、十
一、ノ、十
一、ノ、十

さて其れを有てる人に現はるゝとは、其人之れに依りて自から罪
惡を認め、別けても其の本來の汚れ果てたること、また夫れまで信
せざりしことの罪なりしをも認め、其れが爲め必ずしも罰を蒙るべ
きことを知り、従がつて神の御手より憐憫を受くるには、唯だイエ
スキリストを信するの外なきことを知るに至るなり。さて斯かる事
を認むるにつけ又覺るにつけ、其の心に悲哀を催ふし、また其の罪
惡を耻づるなり。且つ亦其の心の目に世の救主の示めさるゝを見、
初めて生命の爲めに主に従ふことの極はめて必要なるを覺り、さ
ては飢ゑ渴く如く云々と約束のあるに習らひ、其の人も飢ゑ渴く如
くに主を慕ふなり。さて亦救主に頼りたのむ其の信仰の強さ弱わさ
に從がひて、其の平和と喜こびにも加減あるべく、其の聖潔を愛す
ること、益ます主を知らんと欲ふこと、また世に在るかぎり主に仕
へんと欲ふことなどにも、おのづから厚さ薄さのあることなるべし。

さり乍ら斯く其の人に現はるゝなれど、猶ほ之れを恩化の働らきな
りと思ひ悟るは最と最と稀れなり。之れ其の汚れ果てたると又其の
誤まてる考へにて此の事を思ひ違へするに依るなり、かゝれば此
の働らきを其の心に持てる人は、確かに之れを恩化の働らきなりと
合點するまでに、充分深く思ひ圖るべき筈なり。

さて亦他の人には、第一に、其の人がキリストを信する信仰の堅
き告白はしに依り、第二に、其の告白はしに適ふ生涯、乃ち聖き
生涯を送ることに依りて表はるゝなり。げに其の心淨く、(家族あら
ば)其の家族淨く、其の品行の淨く正しき生涯を送るなり。之れに
依りて常に其の罪惡を憎むこと深く、また人無き私なる處にては其
の罪惡ゆゑに自己の身をも憎む程なり、又其の家の内には悪しきこ
とを絶たんと努め、世間には淨きことを擴めんと圖るなり。さりど
て口先き斗りや表面斗りの人の爲す如く、唯だ口に言ふ斗りにはあ

詩五十一
三、二、十
以四結二
三、四、十
四、四、十
馬、太、五
八、五、四
約十、五、四
羅、十、五、四
九、十、五、四
一ノ勝九、
二十立、
十七、三

らで、實に教への能に従がひ信仰と愛を以て之れを行なふなり。之れ恩化の働らき及び其の表章の概畧なるが、卿もし非難すべしとならば非難せられよ、若し之れなくば、我れ第二の問を陳べて見んに、卿は之れを聞かるゝや。

多辯、「我れは今聞く一方にて非難などする方にはあらず、されば次の問とやらんを陳べて見られよ。」

忠信、「そは之れなり、卿は今我が陳べつる始めの方を経験したる事あるにや、將た亦、卿の宗教は言と舌の上のみにありて、眞實と行爲とは依らざるにや。あゝ卿もし此の事に就きて我れに答へんと思は、上なる神も眞實なりとし、又卿の良心も偽りなしとする處を以て答へられよ、『そは自から讃むる者可とせらるゝに非ず、ただ主の讃むる者ののみ可とせらるゝ』とあり、且つ亦、我れは斯く斯くなり爾か爾かなりと云ひて、其の實は己れの舉動も亦隣人も其の偽

はりなるを證しせば、之れ大いなる惡にてあるなり。

多辯は之れを聞き始めて始めは赤面してありしが、やがて又我れに返へり、偕て答へけるやう、「卿は今や經驗のこと、良心のこと、また神のことに語り及び、さては神に訴へて人の言ふ處をも糺さんとするなり。斯かる談は我が望む處にあらず、また斯かる問には答へんとも思はざるなり、卿は我が説法者にもあらず又裁判人にもあらずれば、卿のまゝに爲る筈もなく、また爲らるゝ謂れもなし。まかし卿は何とて斯かる事を問はるゝぞや。」

忠信、「そは我れ卿が進みて語ることを爲るを見、また其の語る處は只だ唯だ思ふ斗りと云ふに過ぎざるを知りたればなり。且つ亦打ち明けて云は、我れは卿の事につきて聞きたることあり、さても卿は口先き斗りの宗教を守る人にて、實は其の舉動と口前と全く裏はらなる由、されば人々は皆な卿が事を基督信者の中の汚點なりと

云へり。又卿の非道なる舉動ゆゑに宗教の道は益ます悪しき待遇を受け、或る人々は卿の邪しまなる仕打ちを見て既に躓つき、又之れが爲めに猶ほ多くの人も躓づかされんの虞れある由、あゝ卿は居酒屋にて神の言を語り、食ばることをし、淫猥を行なひ、罵しることをし、虚を吐き、また無益なる仲間と交はるなど、すべて放埒の極みなり、さらば實や、或る遊女の事を云へる俗諺に、「此の女、女の顔に泥を塗り」とある如く、卿こそ實に多くの信者の顔汚しにてあるなれ」。

多辯、「愈よ卿は根性悪の氣六づかしやに相違なしと覺ゆ。斯くも輕々しく他人の風評を聞き、直ちに人を責めんとするなり、卿ごときとは話し甲斐なし、さらばく」。

其時基督信者は近寄りて其の同伴に云へるやう、「いかにや我が云ひし通りなるべし、とても卿の道と彼の者の慾と合ふ等は無からん。

彼れは其の生涯を改たむるよりは、卿と道連れを止むる方容易しと思へるならん。視られよ我が云へる如く早や去りたり。誰れの損にも非ず其の身の損なり、去るまゝに任せん、却つて此方より遠ざかるの面倒を省き呉れたる次第なり。げに彼の様の始末にて續け行かば、(必らず續け行くべしと思ふなるが)、それこそ同伴の我等が顔汚しともなるべかりしを、さてこそ彼のパウロも「汝等斯くの如き人に遠ざかるべし」とは云ひ置きたれ」。

忠信、「さりながら我身は彼れと此く語りたるを喜ぶなり、かくして置かば再び思ひ返へす事なしとも云はれまじく、縦し左なきまでも我身は打ち明けて云ふ丈けを云ひたれば、彼れ滅ぶるも我身には祟り無かるべし」。

基、「卿が此く打ち明けて語られしは最と宜ろし、當今は此く懇ろに人々を忠告すること稀れ稀れなれば、宗教の道も自づから人の

鼻につく様になれり。そは今の道を説く者多くは口先き斗りの馬鹿者にて、其の宗教は言の上ばかり、又其の品行は云ふに堪へたる淺ましき者多かり、然るに斯かる者ども數多く信者の中に在るにより、自然に世の迷惑となり、基督教の耻辱となり、また誠心ある人々の憂ひとなるなり。あゝ凡ての人卿が爲したる如く道を説きたらんに、と我れ心に願ふなり、然らんに宗教の道が充分に人々の心に入るか、それとも人々の心が聖徒の交はりに堪へざるか、孰れも定かに極まるべき者を、と打ち語る。

其時忠信の歌ふやう、

「言葉の花は麗はしかるも
心に結ぶ實の無かりせば
其の身の末や十六夜の
虧け始めたる月のごと

晴れたる影は唯だ少時

やがて闇路に消えも失せなん」

斯くて兩人は愈よ進み行きたりしが、今しも唯或る荒野の原に差し掛りしかば、猶ほ道すがら見たりし事どもを語りつけ、互ひに其の徒然を慰さめけり。

第六程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春をしぞ思ふ

さて彼の兩人は進み行きて、今しも此の荒野の原を渡り終はらんとしける時、忠信は不圖後方を振り返へりて、一個の人の此方に来るを見出でたり、且つ能く見れば見覚えのある人なるに、忠信は其

の同伴に向ひて、「彼處なるは誰れ人ならん」と云ふ。其時基督信者もつくつく打ち見やりて、「此は我が善き友傳道者なり」と云ふに、「まからは亦我が爲めにも善き友よ」と云ひて忠信は更に言葉を繼ぎ、「げに我身を彼の片折戸の道に打ち立たせたるも彼の人なり」と云ふ。兎角する程に傳道者は此方に近づきて、偕て兩人に挨拶するやう、「懐かしき方々よ、卿等は絶えて恙も無かりけるにや」。

基、「あゝ傳道者どのよ、能くこそ能くこそ來ましつれ、卿の顔を見るに付けて、往時の厚き真情、さては我が限りなき幸福の爲めに、卿が倦むことなく骨折られしを思ひ出づるなり」。

忠信も亦言葉を添へ、「あゝ傳道者どのよ、げに實に能くこそ來ましつれ、我等が如き愛たてき旅人に取りては、卿の道連れほど願はしき者もなし」と云ふ。

其時傳道者は兩人に向ひて、「友人等よ、別れて後ちの道中は如何

に過さされけるぞや、如何なる事にか遇はれけん、また如何なる行動をか爲られつる」と問ひ出でたり。

されば基督信者、忠信の兩人は、互み交はりに道中にて起りつる事どもや、さては是處まで來りぬる辛苦の趣むきなど、事落ちも無く語りてけり。

傳道者は之れを聞きて、「さて、卿等が多くの試練に會ひたりしは然ることながら、能く之れに打ち勝ち、且つ多くの弱點を有てるにも似ず、今日まで此の道を續けたるを見て、甚く我身は喜ぶなり。

げにや此の事に依りて斯くも我身の喜ぶなるは、卿等の爲めは元より、又全く我身の爲めなり、我れは種蒔きて卿等は實を收む、斯くて「播く者と獲者と共に喜ばん」と云へる期近きにあるべし。ゆめ、思ひ止まらざることあるべからず、「そは若し倦むこと無くば

①約翰四
六ノ三十
②加拉太
六ノ九

●哥林多前九ノ二
二十四、二十七

●黙示三ノ十一

●希伯來四十二ノ一

●耶利米九十七ノ一

期に至りて獲り取るべし』と之れあるなり。卿等の前には榮光の冠冕あり、而かも限りなく朽ちざる冠冕なり、『さらば之れを得ん爲めに走るべし』此の冠冕を取らんとて打ち立つ者も多かる中に、或るは途の程も遠く行きたりと思ふ頃、他の者入り來りて之れを其の手より奪ひ去る例もあることなり、『されば有つところの者を堅く保ちて、その冠冕を人に奪はるゝ勿れ』卿等は今猶ほ惡魔の矢の達く處にあり、また『惡を争ひ拒ぎて未だ血を流すに至らず』されば常に神の國を眼の前に置き、見えざる處の事を確く望みて疑がはず、また天に屬ける事の外は一切其の心に入れざるやうにし、且つ何にも勝して能く己れの心と其の慾とに氣を配るべし、げにや『心は凡ての物よりも偽はる者にして甚だ惡し』とあることなり。唯だ唯だ志ざしを堅くして鐵石の如く守られよ、さらば天地の能おのづから卿等の上に添ひ來らん』と云ふ。

●使徒行十四ノ二
全二十ノ二
全二十三ノ

其時基督信者は先づ懇ろに此の勸話の禮を述べ、偕て又猶ほ其の前途の爲めともなるべき事を語られよと願ひ出でたり。そは此の人は中々の豫言者にて、行く行く出遇ひもすべき事を知り、また之れを拒ぎて勝つべき仕方をも告げ得べしと思ひけるなり。忠信も亦此の願ひに同意してければ、やがて傳道者の語り出でけるやう、一さて卿等は『多くの艱難を歴て、神の國に至るべきこと』、また『邑ごとく縲紲と患難なんちを待てり』と云へる偽はりなき福音の言を聞きたるならん。かゝれば卿等の長き旅路も、絶えて無難なれとは望むべくもあらず。げに卿等は其の証しの眞實なるを既に幾程も思ひ知り、猶ほやがて亦知る處あるべし、さて卿等は今しも此の荒野の原を越えなんぞす、されば間もなく一とつに里に達せん、そは追ひく卿等の前に現はれ來るべし。さて彼の里にては多勢の敵に圍み立てられ、烈しく責め苛なまれ、或ひは殺さるゝやも知るべから

●默示二
ノ十

す、かくて卿等の一人、兎もすれば二人とも、必らず血しほに染めて其の志ざしの証しを立つるに至るべし。されど「汝死に至るまで忠信なれ、さらば主は生命の冠冕を汝に與へん」とあることなり。其の受くる處は非業の最後にて、其の苦痛も多分烈しかるべきにもせよ、彼處にて死ぬる方は同伴なる者に勝りて仕合せなるべし、そは直ちに天の都に達するを得べく、且つは亦残りの道中にて出で遇ふべき種々の憂き目より脱がるゝことを得ればなり。兎にも角にも此の里に至らば必らず我が言の應すべきに、其時我れを思ひ出で、男らしく振舞はれよ。また誠實なる創造主乃ち卿等の神に靈魂を委ね、力の限りを盡されよ」と打ち語れり。

其時我れ夢の中に見けるに、彼の兩人愈よ荒野の原を越え果てけるが、やがて聞きしに違はず其の前にひとつの里あるを見出で、けり。其の名は浮華の里なり、さて此の里には浮華市と云へる市あり

●傳道之
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百

て、一歳中休むことなく開かれたり。さて其の名を浮華市と云ふなるは、是處なる里が浮々と軽くして風を捕ふるが如く、また彼處にて賣買する物、さては彼處に来る者、皆な空にして浮かれたる者なりければなり。まことや賢き人の古諺に、「すべて來らんとくるの事は皆な空にして風を捕ふるが如し」とあるは此の事なるべし。此の市は決して新らしく設けられたるにはあらで、大昔より立てる者なり、されば其の由来を云はんに、およそ五千年の昔しなるべし、多くの旅人ありて今此の正直なる兩人の如く、おなじく天の都に上り行きたることなるが、其の頃彼のベルゼブル、アポリオン、またレギオンなど云へる者、其の鬼の群と共に之れを見付け、また其の旅人の通り行くに依りて、さては此の浮華の里が彼の都の道筋に當れるを知り、終にひとつの市を是處に開かんと企だてけるなり、かくて此の市にて在らゆる浮かれたる者を鬻ぎ、また歳歳續くべき

やう定めたり。さればこそ此の市にて賣買する品物にては、家屋敷、
 地所、職業、地位、名譽、尊榮、爵祿、邦家、王國、慾望、娛樂の
 類ひ、また在らゆる目を悦ばす品々は、藝妓、遊女、妻、夫、子
 供、主人、奴婢、生命、生血、身躰、魂魄、銀、金、眞珠、寶石の
 類ひ、其の他何なりとも無からすと云ふことなし。

且つ亦瞞着、欺騙、狂言、勝負事、道化、擬似者、攫徒、曲者、
 其の他此の類ひの者常に此の市に見らるゝなり。

是處に亦無代價にて見らるゝ事あり、そは偷盜、凶殺、奸淫、罵
 晋、讒謗、血塗騒動の類ひなり。

さて斯ほど大きからざる他の市場にても、多くの通りや町ありて
 夫れくゝに定まれる名前あり、何品は何通り、何品は何町など、云
 ふことなるが、是處にても同じく本場、大通り、横町、(實は各國ま
 た各州) などの區別ありて、其所に行かば市の品々最と容易く求め

らるべし。其町々はイギリス通り、フランス通り、イタリヤ通り、
 スペイン通り、セルマン通り、など其の他數多くありて、凡て浮か
 れたる世の品々を賣ることなり。

さて前にも云へる如く、天の都に至るべき道筋は、正しく此の浮
 かれたる市場の里を通れるより、誰れにても彼の都に行かんと思ふ
 者にて此の里を通るまじとせば、是非とも此の世より去るべかりし
 なり。されば諸もろの公の公なる主も、其の故郷に歸へらんとて、
 親しく此の里を通ほられしことあり、而かも其の日は市日にてあり
 つるなり。げに、此の市の長なるはベルゼブルなりしと覺ゆ、其
 時、主を誘ひて其の空しき物を賣らんとはせるなり。主が此の里
 を通ほられしとき、若し唯た俯伏して彼の長を拜みたりせば、此の
 市の王と爲らるゝ事もありつらん。げにや亦主は勝れて尊貴き方な
 れば、ベルゼブルは町より町に之れを誘ひ、一瞬の間に天下の萬國

哥林多
前十五ノ

馬太四
ノ八、九、
路加四ノ
五、七

を示し、あはれ何ぞかして此の祝まれたる君を感はせ、かくて其の空なる者を賣り付けんと價ひを安くして試らみたり。されど主は斯かる空しき品物に絶えて心を寄せられざりしかば、一錢だも費やさずして此の里を去られてけり。斯くの次第にて此の市は古き以前より是處に開かれ、また最盛んなる者にてあるなり。

さる程に、彼の兩人の旅人も、前に云へる如く是非とも此の市を通ほるべかりしかば、愈よ之れに入り行きしに、こは如何に其の入りたるより頓て市人忽ち騒わぎ立ち、其の里も亦左ながら舉りて之れが爲めに乱れてけり。さて夫れには幾つかの理由あり。

第一に、此の旅人等の着たりける衣裳の最と珍らしくて、此の市に鬻がる、類ひには似も付かざりしことなり。されば市の人々皆な不審顔に打ち眺めて、或るは道化者なるべしと云ひ、或るは風癪者ならんと云ひ、或るは又野蠻人なるべしと罵しりたり。

前哥林多
九、十、ノ

第二に、其衣裳の奇態なると同様、其の言語にも皆々不思議の念ひをなせることなり。彼の兩人は自然とカナンの國語を使へるに、市の人々は皆な此の世の者なれば、誰れとて其の言ふことを悟る者なく、さては端より端まで、到る處にて互ひに異邦人と思はれたり。

第三に、兩人の旅人が孰れの品物をも甚く輕しめて、殆んど見向きもせざるにより、商賣人等の皆な少なからず笑止がりしことなり。さて賣らんとて呼び掛くる者あれば、兩人は直ちに手もて耳を掩ひ、「わが眼を外に向けて、虚しきことを見ざらしめ給へ」と呼ばり、又天を仰ふぎて、我が商事は彼處に在りと云はぬ斗りの顔を爲てけり。

七九ノ詩百十

折しも或る人此の兩人の舉動を篤と見て、「さては何をか買はんとするぞ」と嘲弄半分に問ひ掛けたり。然るに兩人は最と眞面目に彼の者を打ち眺め、「われらは眞理を買ふなり」と云ひたりしが、夫れ

十三ノ詩百二

が爲め益ます衆人の侮辱を惹き起し、或るは嘲けり、或るは譏り、
 或るは亦責め叱り、或るは亦打てよ殺せと罵しりたり。果ては事愈
 よ騒がしく、市中に乱れに乱れて人氣も最と、荒立ちけるに、やが
 て此の事市の長に聞こえしかば、彼れ急ぎ出て來り、其の最も腹心
 なる人々に云ひ含めて、此の市を騒がせたる兩人の者を吟味せしめ
 たり。されば兩人は吟味の場に引かれしが、係りの人々は之れに向
 ひて、那方より來り那方に往き、また斯くも異様の衣を着たる仔細
 は如何にと問ふ。彼の兩人は之れに答へて、さても天のエルサレム
 なる其の本國に行く處にて、此の里人や又商賣人に對し、何の不都
 合をも爲さざれば、斯くも乱暴を蒙り、且つ道中の邪魔立てを受
 くる覺えなく、唯だ誰れやらん何を買ふぞと問ひし時、其の買はん
 と欲ふ者は眞理なりとのみ云ひたる由を打ち語る。されど吟味役の
 人々は之れを信せず、却つて風癪者か逆上者か、それとも市を掻き

六三十一
 希伯來
 一ノ十

乱さんとして來りし者に相違なしと思へり。さるからに之れを捕らへ
 て存分に打ち据え、また泥塗れとなしたる上、檻の中に押し籠めて
 市場の晒者と爲してけり。されば久しき間彼處に置かれて、誰れ彼
 れとなく寄り合ふ人の戲弄物、また悪念、返報の的とせられ、彼の
 市正などは猶ほしも其の不仕合せを見て笑ひ居たり。然るに彼の兩
 人は嘲けらるれども嘲けることをせず、反つて之れを祝し、悪口に
 は善言を報い、書を加ふる者には倒さまに親切を盡すなど、最と落
 着きて動する色も無かりしより、市の中にも聊さか意ある誰れ彼
 れは稍や之れを氣の毒に思ひ、却つて多衆を制し止ごめて、之れに
 對する其の仕打ちの卑劣なるを批難し始めけり。斯かりければ多衆
 の者は忽ち其の怒りを此の人々の上に移し、此は定めし檻の中の者
 と同腹の悪人ならんと思ひて、さては一味同心の者と覺ゆるぞ、之
 れをも同じ愛さ目に逢はせやるべしと云ひ罵しる。彼の人々は又之

れに向ひて、さるにても斯く打ち見たる處にては、彼の兩人の者最
と静かにして且つ眞面目なり。況して人を害なはんなどの意ありと
も思はれず、斯かる者をして酷き目に逢はすべくば、げにや是處に
商なひする者の中には、檻の中は愚か、獄門臺にも上ほすべき奴輩
猶ほ多かるべしと答へてけり。斯くて双方種々の押し問答を爲しけ
る果ては、(其の間彼の兩人は最と眞面目に又謹慎みてありけるが)、
終に喧嘩となりて双方入り亂れ、互ひに打ちつ打たれつして傷を受
くるも多かりけり。されば亦彼の兩人は憂たてくも再び吟味役の手
に引き立てられ、重ねて市を騒わがせたる者なりとて、其の罪に定
められけり。やがて傷ましくも鞭打たれ、頭械手械を懸けられ、遂
に此の兩人の肩を持つ者或ひは之れに一味する者の膽を冷やし其の
懲例ともなさんどて、市場の中を鎖づきにて曳き廻はされたり。さ
れど基督信者、忠信の兩人は猶ほく其の舉動を憤しみて、最と物

柔はらかに且つ素直に此の耻と辱しめを忍びけるに、其れが爲め感
を催ふし、(元より數は少なけれど)市の人々にて却つて其の味方と
なる者さへ出で來にけり。此の事愈よ多衆の憤怒を増し、竟には此
の兩人を殺さんと思ひ定むる程になれり。かゞれば皆な口々に脅迫
して、檻や鐵械にては猶ほ慊たらず、市を騒わがせ又市人を惑はし
たる其の返報には、是非とも之れを殺すべしと云ひ罵しる。
されば猶ほ重ねて沙汰を爲すまでとて、再び兩人は元の檻に押し
込められ、足械もて厳しく繋ぎ置かれたり。
さる程に兩人は又彼の信誼厚き傳道者が言を思ひ起し、げに其の
云ひしに露たがはず、斯く種々の愛き節を見るに付け、孰れ兩人の
中にて最後の患難を受くるにも至るべく、さりとて其れも亦云はれ
し如く却つて幸福なるべしなど、互ひに語り且つ慰さめ、實は互ひ
に先を争さふ斗り、我れこそ其の撰びに與からめと心私かに欲ひつ

つも、猶ほ在らゆる者を治め給ふ全智なる者の聖旨に任せ、其の爲らるゝまに、最と満足して、折からの境涯に落ち付き居たり。

さて彼の兩人を罪に定むべきため、然るべき日を定めて法庭を開くこととなりしが、愈よ其の期到りければ、兩人は敵人の前に曳き出だされ、やがて犯人の座に据えられけり。當座の審裁官は太守善嫌と云へる人にて、また兩人が爲めの訴へ状と云ふは、文言こそ些さか變りたれ、事柄は共に一とつなり、さて其の趣むきは次の如し、

- 一、此者どもは市場の敵人にて、又その邪魔を爲す者なること。
- 一、此の者どもは市を騒がせ、分争を起し、又最とも危険なる異端を以て多くの者を惑はす條、我が大君の法律に不敬たること。

其時忠信は此の一とつ書を聞き了り、先づ彼れは唯だ至高き處より猶ほ高く在す者に逆らへる者に逆らひたる旨を答へ、さて更に

言葉を續ぎて、「我れは平和を好む者なれば騒動とては一とつだに起せしことなし。又多くの者を惑はしたりと云はるれど、そは謂はれなし、彼の人々は我れらの眞實なると辜無きとを能く見知りて、惡しきより善き方に移りたるまでの事なり。且つ亦其の云へる大君とては彼のベルゼブルが事なるべきに、それこそ我が主の敵にてあれば、我れは之れを侮り棄て、其の從臣をも蔑視むなれ」と云ふ。之れに次ぎて誰れにもあれ云ふことあらば速やかに出で來り、我が主大君の御爲めに、當の犯人の罪を數へよと觸れ渡さる。かゝれば三個の者証人なりとて出で來れり、其の名は嫉妬、迷信、また阿諛者と云ふ者なりけり。其時審司は此の人々に打ち向ひて、「汝等當の犯人を知る者なりや、また我が大君の爲め、此の者どもにつきて如何なる事をか云はんとするぞ」と尋ねたり。

されば嫉妬は進み出で、斯くも述べけるやう、「閣下よ、我身は久

しく此の男を知れり、されば誓つて此の貴き御前に証しをすべし。さても之れなる者は」

審司、「暫らく、先づ各自宣誓を立てられよ」。

斯くて人々誓ひを了れば、彼の者更に言葉を継ぎ、「閣下よ、此の男は其の名前にこそ申分は無けれ、實は我が國にて類ひ稀なる悪人なり、彼れは總じて『信仰と聖潔の始め』とやら自から呼べる、不忠不敬の思想を説き擴め、之れを以て多くの者を引き込まんども有らんかぎりを盡すと雖ども、却つて我が大君や其の民の事、又は我が法律や習慣などには絶えて頓着することなし。別けても我れ一度其の説く處を親しく聞きしに、基督の教へと我が浮華の里の風俗とは、水と油の如く相背きて、到底も仲良くならんこと思ひも寄らずと云へり。閣下よ此の言草は實に我等の讃むべき事からを責むるのみならず、やがて亦其れを爲せる我等をまでも尤むる者ならずや」。

提摩太
前二ノ十

其時審裁官は之れに向ひ、「其の方は他に申し立つる事なきや」と云ふ。

嫉妬、「閣下よ、我身は云ひ立つる個條いと多かれど、唯だ法庭の煩雜となるべきを思ふなり、さりさて他の方々の証據不充分に、猶は彼の者を死に定むるに足らずとならば、其の砌りこそ我身は一層申し立てをも加ふべきなれ」。

斯くて此の者は席に下げられ、次に迷信呼び立てらる、さて犯人を指し示し、又其の主大君の爲め彼の者に就きて何事の申し立てありやと尋ね了れば、彼れ先づ宣誓を爲して偕て云ひ出でけるやう、「閣下よ、我身は此者と左して相識ある者にもあらず、また此の上知りたしとも欲はざる事なるが、爰かし此の者の最と毒々しき奴なることは、過ぐる日彼れと些と物云ふことありしによりて、我が能く承知する處なり。其時彼れの云ふ處にては、我等が宗教は全く無

益の者にて、かゝる事にては決して神を悦ばすこと叶はずと云ふことなり。閣下よ此の言草より推して考がふる時は、必らずや我等の禮拜は無駄事にて、我等は猶ほ罪障の中に在り、又終には地獄に落つべしと云ふに至らんこと、閣下の最と能く知り給ふ處ならん、之れ我身の申し分にてあるなり」

次に阿諛者を召して同じく誓ひを立てさせ、さて當の犯人に就きて知ることあらば、我が主大君の御爲めに申し立てよと命じたり。

阿諛者、「閣下よ、また貴とき各位よ、我身が此奴を知るは時久し、また彼れが云ふまじき事どもをも云ふを聞けり。抑も彼れは我が貴ときペルゼブル王を罵しり、且つは御尊族の方々なる、伯爵舊人、伯爵淫樂また贅澤伯、欲虚名伯、並びに舊主人放蕩伯、さては男爵有貪慾、其の他すべて華族の面々をば如何にも賤しみて云ひ訕なすなり。猶ほ亦彼れの云ふやうは、叶ふことならば多衆に彼れの心

を持たせて、斯かる貴族たち一人残らず、片時も此の里に存らへぬやうに爲てやるべしと云ふ事なり。其れにもまして彼れは今しも其の審判者にて在し給ふ閣下の事をすら憚りなく云ひ罵しり、卿を呼びて神を知らざる惡黨なりと云ひ、又彼れが此の里中の歷々方に加はへたる種々の惡名を以て、同じく閣下を誹りたるなり」

さて阿諛者が此の云ひ立て了はりし時、審司は犯人の座に打ち向ひて云ひけるやう、「汝、無頼なる、外道なる、さても亦我が君に不敬なる奴よ、此の正直なる方々が汝の罪跡を數へたるを能く承まされ」

忠信、「よろしくば我れ申し開きを致すべし」

審司、「黙れ、黙れ、汝は最早や生け置くに當らぬ者なり、まこと此の場を去らせず立ち所にも殺すべき奴なるが、唯だ我が寛仁なるを衆人に知らしめん爲め、忌めく許し難き奴なれど、姑らく汝が

云ひ條を容るしやるべし。

忠信、「さらば先づ嫉妬氏の云へる處に答へんに、我れ決して斯かる事を云はず、唯だ如何なる法律にても、又は風俗人情にても、神の聖言に悖る者は、全く基督の教に反對なりと云ひたる迄なり。若し我が云ふ處にして過まてりとならば、願はくば我れに説き諭されよ、我れ汝の前にて直ちに其の過ちを改たむべし。

第二乃はち迷信氏の申し立ての儀は、我れ唯だ神を拜むには聖き信仰の無くて叶はぬこと、而かも其の聖き信仰は是非とも神の聖意なる聖き啓示に伴ふべき者なること、斯かれば如何に神を拜むと云へばとて、若し其の爲すところ此の聖き啓示に適はずば、そは唯だ世俗の信心のみ、之かも斯かる信心は限り無き生命の爲めに、何の益も之れ無き事を語りたるまでなり。

また阿諛者氏の云ひ分に就きては我れ云はん、(我が加はへたりと

云へる悪名などの如きは始らく措き、抑も此の里の王を始め、此の人々の名を擧げたる其の群族も其の従者も、皆な地獄に相應しく、到底も此の國此の里にだに在るべき筈の者に非ず。今は之れまでなり、あゝ神よ我れを憐れませ給へ。

審判官は之れを聞きて直ちに陪審の人々を招き、(此の人々は今まで傍らに在りて事の顛末を見聞しけるなり)「さて陪審の方々よ、此の男の爲め近頃我が里に大騒亂の起りたるは方々の承知せらるゝ處なるが、今亦此の律義なる證人等の申し立てをも聞かれ、且つは親しく此の者の云ひ聞き又白状をも聞かれたり。されば之れを殺すも生かすも最早や方々の胸ひとつに在ることなるが、之かし念の爲め我が法律を示めすこと順當なりと考がふるなり。

抑も昔し我が大君の臣下なるパロ王の治世に當り、ひとつの法立てられたり、そは其の宗旨に背ける者どもに命じて、其の生める男

出埃及
第一章

但似理
書三章

の子を悉皆く川に捨てさせしことなり、之れ彼の宗旨違ひの者の殖え加はりて、終に己れよりも強くならんことを慮んばかれるなり。亦之れも同じく大君の臣下なる子ブカデ子ザル王の治世に當り、同じくひとつの法立てられたり、そは誰れにても王の造れる金の像に向ひ、俯伏して之れを拜することを爲さざる者は、即時に火の燃ゆる爐の中に投げ入るべしと云へることなり。亦ダリヨスの治世に當りても、同じくひとつの法立てられたり、そは誰れにても定めの時々の間は王の外如何なる神々をも拜むべからず、之れを爲さん者は獅子の穴に投げ入るべしと云へることなり。さても之れなる逆戻者は、唯だ其の思想のみならず、(元より思ふさへも赦し難きに)而かも其の言と行爲とにて、以上の法の本旨とする處を悉皆く犯したり、されば其の罪決して容謝なり難し。

さてパロの法は、その過害を防がん爲め豫かじめ推量にて立てら

れたる者なれば、今までに之れに觸れたる犯罪の顯著なる者もあらざりしが、茲に初めて其の顯著なる者を見るなり。又第二と第三に對しては、方々も承知せらるゝ如く、此の者我等の宗旨に爭そひ逆らふことなり。さて又其の謀叛に就きては、既に自からも死罪に當ると白狀したる次第なり。

陪審の人々は聞き了はりて別室に退ぞき、互ひに其の意見を述べたる後ち、一議もなく彼等を有罪と認むべき由申し合はせてけり。此の人々の名は心替君、不中用君、意地悪君、好色君、放慢君、瘡癩君、横柄君、怨悪君、虚言者君、無慈悲君、嫌光明君、また難和解君なり、さて各々の意見と云ふは次の如し。

筆頭心替、「此の男の異端なること我が目に明らかなり」。

不中用、「斯かる奴は此の世より打ち棄つべし」。

意地悪、「さて、我れは其の顔を見るも嫌なり」。

好色、「我れは到底も此の者を忍ぶこと叶はず」。
放慢、「我れも忍ぶこと叶はず、此の者常に我が仕打ちを尤むるな
り」。

疝癪、「早や早や、殺すべし、殺すべし」。

横柄、「あゝ賤しき奴、憫然の至り」。

怨惡、「我が心は之れが爲めに躍起となるなり」。

虚言者、「此の者は油断のならぬ奴なり」。

無慈悲、「殺す丈けにては好すぎる位なり」。

難和解、「たとへ我れ全世界を興へらるゝとも、此の者とは仲良く
すること叶ひ難し、さらば速やかに之れを死罪に定めん」。

斯くて是等の趣むきを彼の審裁官に傳へしかば、審司は即坐に其
の罪を定め、之れより忠信を元の場所へ引き立て行き、彼處にて世
にも在るまじき極めて、酷き死罪に行なふべしと云ひ渡したり。

されば人々は愈よ刑に當てんとて彼れを引き出だし、先づ笞にて
之れを打ち、次に拳にて打ち叩き、また小刀にて其の身を刺し、其
の後ち石を投げ掛け、更に劍にて切り苛なみ、其の果ては烙磔にか
けて焼き捨てたり。斯くて忠信は全く其の身を終はりてけり。

折しも我れ見けるに、群衆の後ろに一輛の馬車ありて、忠信を待
ちて在りしが、今其の敵人等の全く彼れを苛なみ了はるや、頓て之
れを迎へ入れ、吹き澄ましたる樂の音に連れて、直ちに天の都の捷
徑を指し、雲井はるかに登りてけり。さて基督信者の方は聊さかの
猶豫ありて再び牢屋に送り返へされ、暫らく彼處に止ままりしが、
去かもまた在らゆるものを主宰ごらせ給ふものの助けにより、人々
が之れに憤怒を移さんとする時、不思議に脱かれて其の道に出で立
つことを得たり、斯くて彼れは斯く歌ひつゝも其の道を進み行きけ
り。

「信薄き者滅び失せて

奈落の底に叫けばんとき

主の祝福を獨り受けて

幾世久しく君は生きん、

歌へ我が友、且つ歌へ、

斯くて傳へよ、死に至るまで

忠信なりし君が名を」。

第七程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春をしぞ思ふ

さて我れ夢の中に見けるに、基督信者は獨りこのみ思ひの外に道

連れあり、抑も此の人は（曩に市場にて基督信者と忠信の患難を受けたる時、兩人の言と行動を篤と見て頼母しくも感起せし者にて）其の名を有望と名乗り、自から進みて基督信者に従がひ、また兄弟の約を結びて道連れとならんことを願ひ出でし者なり。斯かれば一人の者真理の証明の爲めに死に、其の灰蘇生へりて別の道連れを出だしたる形ちなり。亦此の有望更に基督信者に向ひて、彼の市場には猶ほ多くの心を動かせし人々あれば、程なく其の跡を慕たひ來たるべき由をも打ち語れり。

かくて我れ見けるに、此の兩個の者漸やく市を脱れ去りて幾程も無く、又一個人の人の其向ふを通はれるに追ひつきたり、其の人の名は利己主義と云ふ者なり。さる程に兩人は之れに向ひ、「卿は那處の國人にて、また何處まで往かるゝや」と問へば、彼の人はその身が巧言の里の者にて、天の都に行かんとする由のみ云ひて、さて其

の名は語らんとせす。

基、「さても巧言の里とや、斯かる處にも亦善き者の住めるにや」

利己、「さなり、無くもあらず」。

基、「さて卿の名をば何とか呼ぶべき」。

利己、「我身は卿に一面識もなく、卿とても同然なり、卿もし此の道を行かるゝとならば、喜びて同伴もすべきなれど、さも無からんには、我身は獨りにて行くまでなり」。

基、「げに此の巧言の里の事につきては、我身も豫て聞きたる事あり、又確かに富める處なりと云へるやう覺ゆ」。

利己、「其の通り、それに相違なし、我身は亦彼處に富める親戚の者を最と多く有てるなり」。

基、「さて、失禮ながら卿の親戚とは如何なる方々ぞや」。

利己、「されば凡そ里の全体なるが、別けても我が伯爵圓轉滑脱、

おなじく伯爵隨時流、また巧言伯爵、此の方の先祖達に因みて此の里の名も付けられたり。並びに令色君、向兩方君、出放題君、さては我が教會の牧師にて其の名を兩舌と云へる君、此の人は我が母には父方の兄弟なり。斯く我身は今身分貴き者の中に在る事なれど、打ち明けても云はんには、實は我が曾祖父に當る人は、此方に向きながら彼方に舟を遣る渡船夫にてありけるなり。されば我身も其の渡世を承け継ぎて我が身代の大半を儲けたり」。

基、「卿には匹偶もあるなるべし」。

利己、「有るなり、まかも我が妻は然る才女の娘にて、また極はめて才ある女なり。げにや其の母と云ふは彼の機嫌買夫人のことなり。かゝれば其の家系の最と貴ときは云ふ迄もなく、其の躰方も能く行き届きて、上々の方にも下々の者にも、並べて機嫌を取るに妙を得てあり。それはさておき、我等の信する處と彼の几帳面に宗旨を守

る人々とは、唯だ二たつの些細なる點にて稍や違へり。乃はち第一に、我等は風や汐時などに逆らひては、決して船出を爲さず、第二に、我等は宗教の道の全盛なる時のみ、常に最も熱心にて、又空麗らかに晴れ渡り、人々之れを歡こび迎ふる折などは、特に悦こびて之れに従がひ、町中を押し廻はるを此上なき得意とすることなり」と打ち語る。

其時基督信者は少しく離れ行きて彼の同伴なる有望に向ひ、「我れ巧言の里に利己主義と云ふ者ありと聞く、此は或ひは其れならんかと思ひ付きたり。若しや其の者にて在らんには、それこそ油断のなる道連れにて、彼れは此の近在限つての狡猾き奴なりと云ふことなり」と云へば有望之れに答へて、「先づ尋ねて見られよ、よもや其の名を耻づることもあるまじ」と云ふ。

されば基督信者は再び彼の者に近づき、偕て云へるやう、「あはれ

卿は世に又と無き物知りの如く語らるゝことなるが、それにつき我が見當の誤まらずば、我れ卿を當てゝ見るべしと思ふなり、さるにても卿の名は巧言の里の利己主義氏とは云ふならずや」。

利己、「そは我が本名に非ず、實は我身と不和なる者の我れに負はせたる綽名なり、されど善人は多く斯かる辱しめを蒙むる習ひなれば、我身も甘んじて之れを受くるなり」。

基、「まかし人々の此の名を付くるからには、卿にも何か覺えのあることならん」。

利己、「いや、いや然ることなし、唯だ此の名を付けられたりと覺ゆる事を強て求めば、我れ常に如才なく心を配ばり、何にてもあれ其の時々の都合に任せて利益を捕らへ、従がつて我が僥倖を圖ることなるが、大方それらの人々の羨やみての事なるべし、されど斯くして我が得たる多くの物は、乃はち天の祝福にて、其れを却つて鬼

や角と誹る者こそ、實に意地悪るしども云ふべからめ。

基、「さても、さても我身が豫て聞きたる其の人ならんかと、初め卿を推量したるは是處の事なり、猶ほ打ち明けて我が思ふ處を云はん、此の名こそ實に卿に打つて付けたる者にて、卿自から相應しからんと思ふよりも、なほ返かに相應しき者ならん。」

利己、「あゝ卿までも斯く想ふとならば致し方なし、されど卿猶ほ我れと同道せんとならば、我れは卿の好き道連れとなるべし。」

基、「我れと共に行かんとならば、必らず風と汐時に逆らふべきなるが、そは定めし卿の氣に食はぬならんと思はる。且つ卿は宗教の道の全盛なる時と同様、其の衰れ果てたる時にも之れが友となるべく、さては亦其の歡こび迎へられて町々を押し廻はる時と同様、足械手械もて縛らるゝ時にも、其の味方にて在るべきなり。」

利己、「そは無理強と云ふ者なり、玄かし兎も角も連れ立つべきに、

信仰の事は我が自由に任かしおかれよ。」

基、「我が述べたる處を我等と共に守らずとならば、中々一と歩も許し難し。」

其時利己主義は之れを聞きて、「卿愈も同道せぬとならば、卿が追ひ付かざりし前のやうに、矢張り又獨りにて行くまでなり。我れを良き連れなりと悦ばん者も猶ほ跡よりは來ることならん。我が舊來の此の主義こそは我れに益ありて害なき者なれば、我れは決して之れを捨てまじ」と云へり。

さて我れ夢の中に見けるに、基督信者と有望とは彼の者を見捨てて進み行きしが、稍や程あひの隔たりし頃、其の一人後方を振り返へりて、端なくも三個の人の彼の利己主義に従がへるを見てけり。猶ほ能くく見てあれば、彼の人々之れに近づきし時、彼れ腰を卑ふして會釋しけるに、彼人も亦互ひに挨拶してけり。さて此の人々

は其の名を守財者、好錢者、また吝嗇者と呼び、皆な利己主義とは
 幼なき頃よりの學校朋輩にて、共に擲取先生の教へを受けたる者な
 り。抑も此の先生は北國なる貪慾郡、儲好と云ひて市場のある里に
 住まひ、其の教ふる處は取り方の術なり、但し振ぎ取り、賺し取り、
 諂らひ取り、騙し取り、又は宗教の道の假面を蒙りて取ることな
 るなり。彼の四人の面々は特に先生の指導によりて其の術に達し、
 終には皆な同様の塾を開くことも出来たる位なり。
 さる程に、前に云へる如く互ひの挨拶も果てければ、好錢者先づ
 利己主義に向ひて云へるやう、「彼の向ふを通ほるは誰れなるぞや」
 げにも基督信者と有望とは此時猶ほ向方に見えけるなり。
 利己、「彼の者共は揃ひも揃ひし田舎漢なるが、其れは其れ丈に亦
 都詣うでをする處なり」。

好錢、「さりとは、我等共々に良き道連れとなるべき者を、何

とて先きに行き過ぐるならん、彼等も我等も又定めし卿も同じ道中
 を行くことならんに」。

利己、「まことに其の通りなり、然るに向ふなる人々は極はめて几
 帳面にて己れの意見をのみ大層がり、他の意見とは甚く輕しめ侮
 ざるなり、されば誰れにてもあれ、また世にも稀れなる信心を有て
 るにもせよ、若し彼等の爲る通り爲さざらんには、直ちに見捨つる
 と云ふ次第なり」。

吝嗇、「そは宜しからず、かの『義しきに過ぐる』と云ふことあり、
 斯かる人々は自分ばかりの几帳面を振り舞はして、妄りに他人の罪
 を鳴らし、又之れを責むる者なり。さて亦卿とは如何様に又如何程
 も意見の合はざりけるにや」。

利己、「されば、彼等は先づ頑強くも、天氣などに構はずして急ぐ
 べき筈なりと云ひ立て、我身は又風順と沙時とを待たんとするなり。

次に彼等は神の爲めには思ひ切つて如何なる危難をも冒さんとすれど、我身は亦我が一命と身代とを護らん爲めに、すべての都合を見計らふなり。次に彼等は凡ての人々之れに逆らふとも、飽くまで其の意見を立て通はさんとし、我身は亦其の時の模様と身の安全の許す限り、先づ宗旨に従がふと云ふなり。猶ほ亦彼等は宗教の道が窶れ果て、侮り賤しめらるゝ時も之れに従がはんと云ひ、我身は亦其の全盛なる時、空晴れ渡りて人々之れを歡こび迎へん時にのみ、其の友となるべしと云ふ次第なり」。

守財、「それなり、利己主義ごのよ、それこそ卿の守るべき處なれ。我が考へには、誰れにもあれ其の有てる物を保たん爲め、天より自由てふ者を與へられながら、猶ほ其れを失なふ如き痴ましき事を爲さば、それは實に馬鹿者なりと云ふの外無からん。あゝ日の照る際にこそ馬草をば作るべけれ、また彼の蜂を見ずや、冬の間は其の巢に籠り、利益ある時の來るを待ちて、初めて出で、戯むるゝなり。らば我等も亦蛇の如く智くあるべし。神は時に雨を降らせ、又時に日を照らし給ふ。よし愚かなる者どもは濡るゝをも厭はで急ぐにもせよ、我等は猶ほ落ち付きて好き日和を待つべきなり。一方には其の道を守り、兼ねて亦家をも富ませ身をも安らかに保たるゝやうの宗旨こそ、我等の最も悦ぶ處にてあるなれ。げにや思ふても見るべし、神は此の世の好き物を我等に與へ置かるゝからは、我等神の爲めに之れを守るべきは當然の事ならずや。昔しアブラハムもソロモンも道を信するに依りて家富みたり。又善人は「其の積むところの黄金塵の如くに多からん」とヨブも云へり。されど此の善人には彼の向ふなる人々などの似ても似つかぬこと、卿の談しに依りて明らかなり」。

客齋、「此の事には我等皆なひとつ意なりと覺ゆ、されば之れに就

さては最早や云ふ程の事もあるまじくや」

好錢、「さなり、此の事に就きては最早や實に云ふ程の要もなし。

あはれ誰れにても聖書と道理（乃はち孰れも我等の據りどころとする者）を信せざる者は、従がつて又其の身の自由を知らず、且つは

其の身の安全をも求めざることなり」

利己、「さて方々よ、我等は皆な如何にも天の都を志ざすことなり、

されば悪しき事にも遠ざかり、且つは旅の憐さをも忘れん爲め、我

れ卿等の前にひとつの間を供ふべし。

たとへば是處に一個の人ありと思ひ見られよ、牧師にもあれ、商

賣人にもあれ、又誰れにもあれ、兎に角其の人の前にひとつの都合

よき事あり、其れに乗せば忽ち此の世の幸福を得べく、但し其れに

乗せん爲めには、今まで關はりしことなき宗教の道の或る事柄につ

き、責めて外面ばかりにても、是非とも非常なる熱心を表はさねば

ならず、と云ふことありと思ひ見られよ。若し其の目的を達せんた

め此の人其の手段を取りたりとせば、そは又不義なる不正直の人と

云ふべきか」

好錢、「我れは其の問の奥底を合點するなり、されば先づ方々の許

を蒙むりて、ひとつの答へを作り出て見るべし。さて最初に牧師と

云へる方より語らん、假りに一人の有力なる牧師ありと思ひ見られ

よ、此の人其の受くる處の給料最と些少なるも、實は其の目前に返

かに利益多く亦裕かならん方あるを望み、今や又其の望みを達すべ

きひとつの便宜を得、但し其の爲めには一層働らき振りを表はし、

説教の度數をも増して益ます熱心にし、猶ほ亦其の信者等の機嫌を

量りて、自からの主義とする處をも随分枉げて變ゆべしとせんに、

我が考へにては、若し其の道さへ開くることならば、其の人之れを

爲したればとて、又其の外にも猶ほ澤山に爲したればとて、決して

不正直なる人にはあらず。さて其の仔細と云ふは、

第一、其の人が利益の多き方を望むは不法に非ず、抑も其の人の目前に其の事の出で来るは、全く神の攝理に依ることなれば、之れを兎や角と云ひ争そふ筈なからん、されば得らるべくば其の人直ちに之れを取り、其の良心の事などは絶えて問ふにも及ぶまじ。

第二、且つ亦、其の利益を慕ひ望むに依りて、其の人益ます勉強し、また益ます熱心なる説教者となりなごせば、従がつて其の人は益す好き人物となることなり。げに、益ます其の人の才能を能く伸ばさする次第にて、其れこそ神の聖意に従がへることなれ。

第三、さて亦、其の信者等の機嫌を取る爲めには、自身の主義とする處をも變ゆると云ふことに就きては、是れ亦道理のあることにて、(一)、其の人の氣質穏やかにして能く人の爲めに己れを捨つること、(二)、其の仕打ちの優しくも亦愛嬌あること、(三)、従がつて布教

の職には益ます相應しきことなどを表はすなり。

第四、以上の次第によりて考がふるに、利益の少なき方より多き方に移ることを爲したればとて、直ちに其の牧師を貪慾なりとは定むべからず、寧ろ其れがために益ます出精し、又其の才能をも伸ばしたるにより、之れ能く其の職分を盡し、且つは其の手に供へられたる好機會を用ゐて善事を爲す者なりと云ふべき筈なり。

次には商賣人と云はれし方に就きて語らん、是れ亦假りに一個の商賣人ありて、世にも貧しく業を營なめりとせんに、其の人若し宗教の道を信するならば、其の事に依りて忽ち商賣の手順新たまり、或ひは金満家の女を娶ることを得らるべく、又は迢かに好き得意客をも得らるべしと爲て見られよ。我が考へには、是れ亦斯くなしたりとて聊さかも無法なる謂はれは無かるべし。さて其の仔細と云ふは、

第一、宗教の道を信ずると云ふことが一徳なり、其の信ずる道筋などは兎や角うも云ふに及ばず。

第二、金満家の妻を呼び、好き花客を増すこと決して無法にあらず。

第三、且つ又、宗教の道を信ずる事に依りて利益を得んとする人は、先づ自から善き者となり、善き事をもて、善き物をば得んとするなり。

あゝ善き妻、善き花客、また善き利得、まかも唯だ宗教の道を信ずること乃はち善き事を爲すに依りて皆な我が有となる、されば凡て是等の物を得ん爲めに宗教の道を信ずること、實に善且つ益ある工面なりと云ふべけれ。

好錢者は斯く陳べて利己主義の間に答へしかば、人々は手を拍つて甚く讃めそやし、さては其の云ふ處全く申し分なく又有益なりと

語り合へり。猶ほ此の人々は何者たりとも此の説に反對すること叶ふまじと思ひ、且つは基督信者と有望の未だ遠くも往かざるを見、實は亦彼の兩人が前に利己主義に云ひ逆らひたるにより、いざ疾く追ひ付きて此の問題を持ち掛け、彼の兩人を攻め立て呉れんと申し合せてけり。されば皆な彼の兩人を呼び掛けしに、彼等は頓て立ち留まりて靜かに人々の來たるを待ち居たり。人々は又行く行く思ひけるやう、さても利己主義と彼の兩人の争そひ分かれしは唯だ少し前の事なれば、互ひの相對にては其の熱氣も未だ冷めやらぬことなるべしとて、此度びは利己主義の代はりに年長なる守財者を頼みて、此の間を陳べさすべしと定めてけり。

さる程に、双方互ひに近づきければ、先づ一應の挨拶を了はり、偕て彼の守財者は基督信者と其の同伴に向ひて例の問を語り出で、出来るならば答へて見られよと云ひ立てたり。

其時基督信者の云へるやう、「およそ幼兒にても眞に宗教の道を信する者には、斯かる問の百や千やを答へんこと何の造作もなきことなり。既に書にもある如く、パンの爲めに基督に従がふことさへ不法ならば、況してや基督と其の宗教とを託に使ひて、獨り浮世の幸福を占有めんとする者の不埒は如何ばかりぞや、げにや斯かる事を云ふ者こそ、多くは異端者、偽善者、悪魔、また魔法使の類ひにてはあるなれ。

第一、異端者と云ふは、昔しハモルとシケムがヤコブの女と又其の家畜とに心を寄せける時、割禮を受くる外には絶えて願望を達する途なきを見ければ、「若し唯だ我等の中の男子皆な彼等が割禮を受くる如く割禮を受けなば、彼等の家畜と財産と其の諸々の畜は我が所有となるに非ずや」と云ひたり。げにや彼等の得んと願ひし者は其の女と其の家畜にて、其の宗教を奉じたるは唯だ之れを託に使

約翰六ノ二六

創世記二六、二四、二六

はんと爲たるまでなり。先づ創世記を開きて其の一伍一什を讀んで見られよ。

第二、偽善なるパリサイ人と云ふも亦此の類ひの信心なり。彼等は長き祈禱を託に使ひて、實は寡婦の家を食はらんとするなり、されば神より受くる審判の刑罰も亦一層重かるべき者なり。

第三、彼の悪魔なるユダも亦此の類ひの信心なりけり。彼れは財蕪の爲めに宗教を信じ、其の中なる物を占有めんと思ひしが、終に棄てられ見離され、又實に沈淪の子と爲り果てたり。

第四、彼の魔術使なるシモンも亦此の類ひの信心なりけり。彼れは聖靈を受けんことを願ひ出でたれど、實は其れに依りて金錢を儲けんと欲ひけるなり、さればペテロは宜しくも之れに云ひ渡しを爲して、爾の金は爾と借に亡びよと云ひたるなり。

第五、げにや世財の爲めに宗教を信する者は、また世財の爲めに

路加二七、四十四

全十七ノ十二、使徒行八、十三

之れを捨つるに至るべきこと、唯だ我れのみ考へかは、抑も彼のユダが宗教を信じて世財を得んと謀らみ、まかも其の爲めに基督をも亦其の宗教をも賣りたる例にて最と明らかなり。されば此の問に答へて是と云はんも等しく異端、僞喜、また惡魔らしきことなるが、我が見受くる處にては、卿等は已に斯かる答へをなし、又申し分なき者と思ひ居るならん、斯くては卿等の行爲に依りて應報を受くべし」と云ふ。

彼の人々は之れを聞きて互ひに目と目を見合はせ、頓に答ふることも得せざるに、有望さへ言葉を添へて基督信者の云へることの確實なるを讃めければ、皆な愈よ静まり返へりて、さては利己主義を始め一同逡巡りして故意と遅れ、基督信者と有望とを遣り過さんと爲てけり。基督信者は之れを見て其の同伴に向ひ、「あはれ彼の者どもは人間の云ひ渡しにさへ申し開きをすること叶はず、斯くても神

の云ひ渡しを蒙るときは如何にすべきぞ、また我等の如き土塊同然の者に云ひ籠められてさへ口を閉づるやうならば、怒り烈しく火焔の責を受くる時には、實に如何やうにか爲すべからん」と打ち語れり。

さても基督信者と有望とは再び彼の人々を通り越して行く程に、安樂が原と呼べるひとつの麗はしき野原に出でたり。されば兩人は世にも爽快く此の處を進み行きしが、此の野原は其の亘り極はめて狭まかりければ、やがて残り惜しくも越え果てけり。さて亦此の野原の盡きなるとする處に金儲の山と呼ぶる、小山あり、其の山は銀山にて往時此の道を通りける人々の中には、其の山の珍らしさに心引かれて、見物せばやと本道を離れ去りし者多かりしことなり。まかも餘りに銀坑の口に近づきては、其の足下の地面の惑はしき者なるまり、ゆくりなく落ち込みて殺されけるもあり、或るは取り返へ

提摩太
後四ノ十

しの付かぬ傷を受けて、生涯不具となりたる者もありけるなり。
さる程に我れ夢の中に見けるに、此の道より少し離れて彼の銀山の入り口なる處に、往來の人々を招き寄せんとて、(紳士ぶりたる)デマスと云ふ者立ちて在りしが、今しも基督信者と其の同伴とに打ち向ひて、「オーイ、來ても見られよ、卿等に見すべき物あれば是處まで其道を離れて來られよ」と云ふ。

基、「此の道を離れさせてまでも見せんと云ふは、如何ほど値打ちの有る物ぞや」。

デマス、「されば此處は銀山にて、多くの者此の中に財寶を掘り取ることなり。卿等も來らんとならば、些さかの骨折りにて忽ち富裕の身となり得べし」。

有望之れを聞きて、「さらば行きて見るべし」と云ふ。

基、「いや、行くまじ、我れ以前より此處のこと、並びに多くの人

人の此の處に殺されたることを聞き及べり。且つ其の財寶と云ふも、實は其れを欲しがる人々のための係蹄にて、全く其の道中を妨たぐる者なり」。

其時基督信者は彼のデマスに向ひて、「其れなる處は危険にて、多くの旅人を妨たげたる事あるならずや」と呼ばり云へば、

デマスは之れに答へて、「不注意なることさへ爲すば、左まで危ぶなきこともあらず」と云ひつゝ、其の面を赤らめたり。

されば基督信者は有望に向ひ、「一と歩も枉ぐることなく、何處までも此の道を續くべし」と云ふ。

有望、「我れ思ふに、利己主義たち上り來りて我等と等しく誘はれたらんには、必らず見物せんとて彼處に離れ行くことならん」。

基、「それは疑ひなし、彼の者どもは其の意見通り彼の途に踏み込み、百に一つも助かることは無かるべし」。

其時デマスは再び呼び掛けて、「卿等兎も角も来て見られずや」と云ふ。

されば基督信者は用捨なく之れに答へて、「いかにデマス、汝は此の道の主に背き、其の義しき道には敵たる者なり、まかも汝は此の道に背きたる爲め、既に我が主の審判官に依りて其の罪を定められたる者なるに、何ぞて我等をも連れ行きて同じ罪に落さんとはするぞや。且つ亦我等は畏れなく主の前に出づることを得る身なれど、若し苟めにも此の道を離れたりとせば、主大君は確かに此の事を聞き給ひて、必らず我等を耻辱に渡し給ふべし」と云へば、

デマスは又此方に向ひ、其身とても彼の兩人とは元と兄弟の縁故ある者なれば、若し彼等にして暫しがほど逗留して行かんには、其身も共々に連れ立つべき由打ち呼ばる。

其時基督信者また云ふやう、「さても汝の名は如何に、定めし今我が

が汝を呼びたる其の名ならん」。

デマス、「云はるゝ通り我が名はデマスにて、我れはアブラハムの裔なり」。

基、「我れ汝を能く知れり、汝の曾祖父はゲハジ、また汝の父は彼のユダにて、汝は亦其の跡を踏む者なり。汝が爲馴れし事とては皆な悪魔の業ならぬはなく、既に汝の父は不忠者とて絞罪に處せられたれば、汝も追つ付け同様の應報を受くべきなり。我等大君の前に至らん時、必らず、此の汝が所業を主に告ぐべし」。

斯く云ひ捨て、兩人は其の道を進みたり。折しも彼の利己主義の連中は再び後ろの方に見えたりしが、あはれ唯だ一と招きにてデマスの方に離れ行きたり。さて其の後は其の坑内を覗くごとて之れに落ちたるか、或るは銀を掘るとて其の中に入りたるか、或るは常に此の底より立ち騰る一種の毒氣に中りて死

に失せたるか、其の邊の事は我れ之れを知るに由なけれども、兎に角に我れ再び彼の人々の此の道に在るを見しことなし。されば其時基督信者の歌ひけるやう、

「黄金の色の鮮やかに
花麗はしき山吹も

みのなる果てこそ墓なけれ、

天つ御國に行く旅人

心移すな其の山吹に」

さて我れ見けるに、彼の旅人等は愈よ此の野原を越え了はりて、唯或る處に着きたりしが、是處には一個の古き石塚ありて此の街道の路傍に立てり、其の形ちの異様なる宛ながら婦人の姿の化して柱となりたらんやう覺えらるゝに、彼の兩人は之れを見て訝かること大方ならず、されば暫しが程は是處に立ち盡し、唯だつくゝと打ち

眺め、また打ち眺むる斗りにて兎角の辨まへも付かざりしが、稍やありて有望は其の頂きの邊りに、尋常ならぬ筆ぶりにて書かれたる文字あるを見出で、けり。されど自身は文盲なれば（先づ學識ある）基督信者を招き、其の意味いかにやと指し示すに、彼れ近寄りて篤と字の配りなど調べつゝ、偕て其の意味は「ロトの妻を憶へ」と云ふ者なるを悟りたり。かゝれば其の由を彼の同伴にも讀み聞かせ、さては是れこそ昔しソドムの災難を脱ぬかれし時、慾深き心に引かされて後方を回顧たる爲め、忽ち塩の柱に化せられたりてふ、彼のロトが妻なりけれと悟りたり。げにも思ひ掛け無き不思議の態を見るにつけ、兩人は又此の談を始めてけり。

基、「あゝ兄弟よ、此は實に節に適へる見ものとも云ふべきなり、先づ金儲の山を見物せずやと彼のデマスの誘なひを受け、次に此の態を目に見ること、さて〳〵他事にはあらざるべし。我等もし彼の

者の望みに任せ、又實に卿の心の動きしに、道を離るゝことを爲したりせば、必らずや我等も此の婦人と同じ姿になりて、後々の懲鑑とも爲されしならん。

有望、「我身は自からの淺ましかりしを甚く悔み、またロトの妻の如く爲らざりしを今更らのやうに訝しむ斗りなり。さても此の女の罪と我身の罪と其の遠ふ處幾ばくぞや、彼れは唯だ後方を向き、是れは亦行きて見んかと欲ひしのみ、されば神の恩恵に依りて我が救はれしを覺えん、また常に斯かる事の我が心中に在るを耻とすべし。基、「げに行く」の心得ともなるべければ、是處にて見つる事を能く心に留むべきなり。あはれ此の女とてもひとつの天罰を脱かれ、幸ひにソドムの災難にては失せざりしも、而かも猶ほ他の事にて滅ぼされ、我等今日のあたり見る如く、塩の柱と化せられたる次第なり。

有望、「云はるゝ通り、實にも此の女こそ我等のために警戒とも又懲例ともなる者なれ、先づ我等は此の女の罪過に習ふまじきとの警戒なり、次に此の警戒にても猶ほ思ひ止ごまらずば、天罰必らず及ぶべしとの懲例なり。昔しコラ、ダタン、またアピラム、並びに其の家從二百五十人、或ひは地その口を開きて呑み盡し、或ひは火出で、焼き盡し、斯くて皆な其の罪惡の爲めに滅ぼされ、是れ亦後々の者に目ざましき懲例となりたることあり。さは然ること乍ら我身に考がへ餘るゝひとつの事あり、そも此れなる婦人は(別にひと歩にても其の道を踏み出でたりと云ふことを聞かねば)唯だ世財を慕ひて振り返へりたる斗りにて、塩の柱と化せられたる次第なるに、殊には亦此の女の蒙むりたる天罰ひとつの懲例となりて程近き邊りに立ち、少しにても其の顔をさへ擧げんには、嫌でも應でも之れを其の目に見ることなるに、まかも彼のデマスや其の同類が其れにも増

して世財を捜し索めつゝ、猶ほ得意にて斯く彼處に立つことを得るは、抑も如何なる仔細なるべき。

基、「そは實に尤もなる不審なるが、之れにても亦彼等の心全く其事の爲めに狂暴となり居ること知らるゝなり。彼の者どもを物に譬へば、先づ盗人の判決かるゝを聞きながら法庭にて他人の懐中を狙ひ、或るは盜賊の首斬らるゝを見物しながら、斬罪場にて巾着切を働く類ひとも云ひてんのみ。げにヤソドムの民は『神の前に』罪人なりしに依りて『大いなる罪人なり』と記されたり。抑もソドムの地は神の恩愛を受けて、其の頃までエデンの園の如く麗はしかりつれど、彼等は其れをも思はずして、却つて神の目の前に罪惡を犯したるなり。されば之れが爲め神の憤怒を惹き起したる事も一層烈しく、其の禍害も彌や募りて、終には天より火を蒙むるに至りしなり。斯かる次第より道理を推せば、凡そ誰れにもあれ、實に彼の者ども

創世記
十三ノ十

詩四十四
六ノ四
以四結四
十一ノ七
一ノ九
二ノ十

の類ひは更なり、かくも其の身を警戒しむる懲例を、絶えず其の目前に見乍らも、さては又之れを輕忽にしながらも、強て其の罪惡を行なはん者は、必らず最も嚴しき天罰を蒙むるべき筈ならずや。有望、「卿の云はるゝ處極はめて眞理なり、さりさては我身は云ふに及ばず、卿も共に此の例と爲らざりしこそ仕合せなれ、されば此の機を心に念じて、先づ神に感謝することをし、又其の大前に畏こみ恐るゝことをし、さては又常にロトの妻を憶ゆることを爲すべきなり。」

さて我れ見けるに、彼の兩人は其の途を進みて、此の時唯或る川の邊りに出でたり、此はダビデ王には『エホバの川』と呼ばれ、またヨハネには『生命の水の川』と名付けられたる最と快潤き處なり。今しも其の道筋は此の川岸に沿ひたることなれば、基督信者と其の同伴は最と楽しく是處を通り、時には又流の水を掬ひて疲れし心を

慰さめ、また其の元氣を養ひけり。且つ亦川岸の兩側には緑りの木立ち立ち並びて種々の木の實を結び、其の葉は又薬となりて、旅の身には起り勝ちなる食中りなど、其の他の病ひをも癒してけり。なほ亦川の右左りには百合の花妙へに麗はしく咲き匂ひたる野原ありて、一と歳ながら緑りならずと云ふことなし。此處は物皆な安らかにして危ふきことも無かりければ、兩人は野に伏して且つ眠り、且つ目醒めては木の實を拾ひ、また清き流れの水を掬ひては再び伏して憩ふなど、かくて楽しく幾日幾夜を重ねてけり。其の時兩人の者歌ひけるやう、

「遠く浮世を離れ来て

休らふ今日こそ樂しけれ、

生命の川は水清く

緑りの野には百合薫る」。

さる程に、(未だ行程の末も見ぬことなれば)、再び道を續けんとて支度を整のへ、且つ飲み且つ食しつゝ、また此の處をも去り行きけり。

さて我れ夢の中に見てあれば、彼の兩人是處を立ち出で、幾程もなく、早や彼の川邊と其の道筋の遠さかるにぞ、いとゞ名残を惜みてありしが、猶ほ其の道を離るゝことは爲さざりけり。然るに川邊より此の方は其の道次第に難澁なるに、足さへも今は長途に疲れてければ、兩人は甚くも其の心を苦しめたり。されば猶ほ行くゝ善き途もあれかしと欲ふ折しも、此の往來の左り手に當りて程近き處に一とつの野原あり、又其の方に越え行くべき石段あるを見出で、けり。さて此の野原は其の名を拔道の野と呼ぶ。其時基督信者は其の同伴に向ひて、「此の野若し我が道筋に當らんには、我等は彼方に越え行くべし」と云ひつゝ、彼の石段に行きて見るに、視よ垣根の

彼方にも一條の通路ありて、元の道に並らび沿ひたり。されば基督
信者は言葉を織ぎ、「これこそ我が望むところにて、行程も最も容
易げなり、いで有望ごのよ、さらば彼方に越え行かなん」。

有望、「されど若し本道を失なふやうの事あらば何とすべき」。

基、「其の様の事はあるまじ、見られよ此の通り本道筋に沿ひたる
ならずや」。

斯くて有望も其の同伴の勧誘に従がひ、彼の石段を越え行きけり。
さて愈よ越え了はりて小徑に入れば、なべて平坦にして足の運びも
最と輕きに、兼ねて亦其の向ふを見渡して、一個の人の同じく是處
を通ほるを見出で、けり。此の人の名は自己頼なり。さるからに兩
人は大聲にて之れを呼び掛け、此の道筋は何方に行くやと問へば、
彼の者振り返へりて、「天の城門に至るなり」と云ふ。基督信者は之
れを聞きて其の同伴を顧りみ、「見られよ、我等は正しき道に在り、

全く我が前に云へる通りならずや」と云ひつゝ、彼の者に追ひ着かば
やと進み行きけり。されど覺束なくも日は暮れ果て、空いと暗く
なりたりしかば、忽ちにして前なる者の姿を見失なひてけり。

さて彼の前なる者は、(げにや其の名も自己頼とて) 其の足もとを
慎しまざりしかば、暗さは暗し、忽ち深き坑に落ち入りて、憂たて
くも粉微塵に碎けてけり。抑も此の坑は兼ねて處の主の計らひによ
り、斯く己れを待みとする者を捕らへんとて設け置かれし處なりけ
り。

其時基督信者と其の同伴は彼の者の落つる物音を聞き、さては何
事の起りたるぞと大聲に呼ばりしが、絶えて答ふる者とはなく、
唯だ僅かに呻き聲を聞くのみなり。されば有望は其の同伴に向ひて、
「此は又何たる處ぞや」と云ふに此方は初めて其の誤まりを疑がひ
つゝ、唯だ默然たる斗りなりけり。折しも俄かに雨降り出で、鳴る

雷、電光、いや凄まじく、又水さへも溢ふれ出でたり。

有望は此の有様を見て切りに嘆き、「あ、彼の道を離れざりせば可かりしものを」と云ふ。

基、「さりさて初めより此の小徑が斯く怪しかる者とは誰れか思はん」。

有望、「我身は抑もの始めより斯く在らんかとも殆ふみたればこそ、聊さか卿に念をも押しつれ。あ、卿我れよりも年上ならざりせば、彼の時白地にも諫むべかりし者を」。

基、「あはれ兄弟よ、卿は腹立たしくも思はるべけれど、何卒我身を容赦せられよ、斯く卿を道より離らせ、また斯かる危ふき目に遇はすること、我が氣の毒に思ふ處なり、且は亦悪しき意より爲つることにもあらざれば」。

有望、「固よりなり、兄弟よ、我身何とて腹立つことかは、却つて

之れこそ我等の益ならめと信するなり」。

基、「我身は情深き兄弟と共なるを最と嬉しく思ふなり。さるにても是處に立ち盡す譯にも行かねば、いざ再び返へり行く事とせん」。

有望、「さらば兄弟よ、此の度は我れ前に行くべし」。

基、「いや、何卒我身を先に遣られよ、我が粗忽より共々に道を離れし事なれば、若し危難にても有らんには、我身また先づ之れに當るべしと思ふなり」。

有望、「いや、いや、卿必らず先立つべからず、卿の心乱れ居れば重ねて迷はじとも斗り難し」と云ひ終はる折しも、那處ともなく人の聲ありて、「汝の行ける道なる大路に心を留めよ、返へれ其の道に立ち返へれ」と云ひつゝ、兩人を勵ましたり。されど此の時に至りて大水益ます漲ざりたれば、其れが爲め返へり行くべき道また甚だ危ふかりけり。(其の時我れ私かに思ひけるは、げに我等の守れる道を

一ノ三十一
一ノ三十一
一ノ三十一

捨つることは最と容易きも、まかも一旦離れたる方より立ち返へるは斯くも極はめて難きことやと、さて兩人は之れを冒して返へり行かんを爲たりしが、闇は闇なり、水は高し、あはや溺れなんどせしことも數多度なりけり。

斯くて兩人は力を盡し、且つ勵み且つ急げども、到底も其の夜は彼の石段に達せんこと覺束なかりしかば、漸やくにして些さかの樹蔭を頼り、是處に夜の明くるを待たんとて休らひしに、兩人共に疲れ果てたることなれば、やがて前後も知らず打ち眠れり。さて此の場所より程遠からぬ處に一とつの寨あり。其の名は懷疑の城と呼び、其の城主は絶望入道と云ふ巨漢なり、また今しも彼の兩人の眠り居たる土地も其の領分にて在りけるなり。斯かりければ其の翌朝彼者疾く起き出で、是處彼處と見廻はりけるとき、ゆくりなく基督信者と有望の其の領内に眠り居るを見付け、忽ち恐ろしくも氣味悪き

聲を揚げて彼の兩人を呼び醒まし、さて那方より來り、何とて其の領分を侵したるぞと尋ねたり。兩人は之れに向ひて、其の旅人なること、並びに道に迷へる者なる由を告ぐれば、彼の大漢は更に言葉を繼ぎ、「汝等は夜陰に乗じて我が領内に忍び入り、而かも此處に眠りたること不埒千萬なり、さるに依つて我れ今汝等を引つ立て行くべし」と云ふ。元より此の大漢は其の力拔群なれば、兩人は餘儀なくも引き立てられ、且つは其の身の落ち度をも知ることゝて、何と云ふ由もあらざりけり。斯くて兩人は追ひ立てられて寨の内に入れられ、別けても穢せき牢の中に閉ち籠められたり、其の中は暗きこと夥多しく、むさぐるしき臭氣充ち満ちて此の人々の心には最と堪へ難きことなりけり。此處に兩人は水曜日の朝より土曜日の夜まで置かれたりしが、一片の食物、一杯の水、また燈火、また物問ふ者とても無かりければ、其の傷ましさを云はん方なく、元より友ごち

も知人も絶えて見ることにはあらざりしなり。そも此の悲しみの原由を云へば、全く基督信者が獨り合點の失錯なるより、彼れは是處に二重の愛ひを覺えてけり。

さて絶望入道には一人の妻ありて、其の名を疑念と呼べり。さる程に其の日も既に暮れけるとき、彼れ此の妻に向ひて在りつる事どもを告げ、かの兩個の囚人其の領分を侵したるに依り、之れを捕らへて獄屋の中に投げ入れたる由を語り、さて亦如何にせば更に可からんかと尋ねたり。されば彼の妻は先づ此の兩人は何者にて、那方より來り、また何處に行く者なるやと問ひ、次に其の夫に勸めて、明朝は疾く起きて思ふ存分に叩くべしと云ふ。さる程に翌の朝もなれば、彼の者は凄まじき頭大の棍棒を取りて牢屋の中に下り行き、先づ何の云ひ逆らひをも爲すことなき彼の兩人に向ひ、宛ながら犬を苛なむ如く責め罵しり、次に兩人を押し据えて恐ろしくも打ち叩

き、さては身動きとても叶はぬまでに苛なみたり。斯く爲し果て、彼の者やがて出で行きしかば、後に兩人は身の愛き節を打ち嘆ち、又其の苦難を悲しみて、其の日一日を盡させぬ嘆息と苦き涙に送りてけり。其の夜彼の妻は重ねて夫と物語りして、彼の兩人の未だ死に失せざるを聞き、さりさては自殺を勸むるに如かじと慫慂かしければ、彼の者翌朝起き出で、前に變はらぬ氣味悪き姿にて下り行き、彼の兩人が昨日の傷手に甚く惱めるを篤と見やり、さて之れに打ち向ひて、此の處を脱れ出でんは到底も覺束なき次第なれば、寧ろ毒藥にても、縊り繩にても、また短刀にても、孰れをか用ゐて其の身を果たすの外無かるべき由を語り、猶ほ言葉を添へて、「斯くまで辛らき事の多き上は、死ぬるに勝る事もあるまじ」と云ふ。されど兩人は單へに放し赦されんことを願ひけるに、彼の者之れを聞きて烈しき怒りを催はし、あはや攫みかゝりて殆ふくも其の息の根を

絶やさんと爲たりしが、其の折しも俄かに持病の起りてければ、(實は天氣の晴れやかなる時は、彼の者時々此の病に掛かることにて)、其の手忽ち不随となりたり。されば前の如く兩人を殘し、猶ほ能く考がへ見よと云ひ捨て、出で行きたり。其の時囚はれ人は互ひに相談し、さても彼の者の勧めを聞かんか、それとも亦如何にせば可からんかと思案に時を移してけり。

塞、「兄弟よ、あゝ何とせん、げにも憂き身の味氣なさ、かくて生き存らふると、手づから死ぬると、孰れ勝れりとも辨まへ難き斗りなり。されば『我が心は氣息の閉ぢんことを願ひ、我が此の骨よりも死を乞ひ願ふ』、とも在るならずや。我れ思ふに墓場は此の牢屋よりも猶ほ安らかならん、さらば一と念ひに彼の大漢の云ふことを聞かなんか」。

有望、「まことに傷ましきは我等が現在の境遇にて、斯くて何時ま

約百七十五

出埃及三十二

約翰三十一

でも存らへんよりは、寧ろ死にたる方身に取りて速かに願はしくも思はるゝなり。さりながら猶ほ考へても見るべきは、『汝殺す勿れ』とあることなり、之れ我等が志ざす都の主の云ひ置かれし處にて、既に他人を殺すをさへ禁せらるゝ程ならば、況して他の云ふことを聞きて自から殺すなどは極はめて爲すまじき事なるべし、抑も他人を殺すは唯だ其の肉躰を害むるのみのことなれど、自から殺すは中然らず、實に其の肉躰と共に其の靈魂をも害むるなり。且つ亦兄弟よ、卿は墓場の方安からんと云はるゝ事なるが、玄かし「凡そ人を殺す者は限り無き生命なし云々」とありて、すべて殺す者の確かに地獄に落つべきことを卿は忘れたるにや。また思ふても見られよ、彼の絶望は大漢なれども總ての權を其の手に有てるにもあらず、げに我が知る處にても、我等とおなじく是處に捕らはれたる者にて、猶ほ彼れが手を脱れし者さへあることなり。況してや萬物を造り給

ひし神のまに、或ひは彼の絶望の俄かに死し、或ひは牢屋の戸
 ぎまりを忘れ、或ひは又我等の前にて例の持病に掛り、急に手足の
 自由を失なふやうのこと、絶えて起るまじとも云ひ難し。さらば若
 し是等の事の在らん時は、我れは男らしく奮ひ起ち、必死となりて
 脱れ出でんと心を定めたり。げに前に之れを爲さざりしは愚かなり
 しとも云は云へ、兎に角兄弟よ、今暫らく辛抱すべし、やがて運
 の開くべき時も来るべきに、先づ我れと我が身を殺すとは共に爲す
 まじ。斯く語りて有望は同伴の心を慰さめければ、やうやくにして
 自殺だけは思ひ止ごまり、其の日も暗黒の中に共に坐して、猶ほ其
 の悲嘆を續けてけり。

さて其の日の夕暮る、彼の大漢は再び牢屋に下り行き、其の囚
 人等が勧め通ほりになり居るならんと思ひつゝ、中に入りたりしに、
 此は如何に兩人とも猶ほ生きて在り、げにや生けることは生きなが

らも、絶えて飲み食ひすることも無く、且つは手痛き傷を受けたる
 に依り、今は僅かに息の根の通ほのみと爲り居たり。されど兎も角
 も生きて在るに相違なければ、彼の者見るより凄まじき憤怒を催ふ
 し、よし、其の勧めに従がはざるからは、更に辛らき目に逢はせ
 やるべく、それが爲め此の世に生れたるを悔ゆるにも至らんと云ひ
 罵しる。

彼の兩人は之れを聞きて甚く震ひ恐れ、別けても基督信者の方は
 氣絶したるやう覺ゆ、されど暫らくありて我れに返へり、再び大漢
 の勧めに就きて互ひに相談を始めた。かくて之れに従がはんか、
 また従がふまじきかと語らひしが、又しても基督信者は之れに従が
 はんとする様子なるに、有望は之れに向ひて次の如く云ひ出でたり。
 有望、「あゝ兄弟よ、卿は之れまで最と勇ましく在りたるに、今は
 自から其の事を忘れられしや、彼のアポリオンも卿を取り控ぐこと

叶はず、さては死の蔭の谷にて見もし聞きもし亦觸れもし爲つる者
 とても、等しく卿に勝つこと叶はず、げにや卿が越し方の艱難辛苦
 は如何斗りぞや、然るに今となりて兎角に恐れ惑ふとは何事ならん。
 見らるゝ如く卿と共に此の牢屋に在る者は我身にて、元來卿よりは
 迢かに弱き者なり、まかも彼の大漢の爲に卿と等しく傷手を蒙むり、
 又我が口より飲み食ひをも絶たれ、且つは暗黒の中に悲しむことな
 り。されど今少しく耐え忍ぶことの修行をせんと思ふなり、卿とて
 も彼の浮華市にて男らしく振舞はれしこと、又鐵鏈をも彼の濫をも、
 さては酷たらしき最後をも、物の數とも爲ざりしことは、よもや忘
 れも爲られざるべし。さらば（責めて基督信者たるに耻ぢざらんた
 め）我等出来る丈け忍耐して身を守るべし。
 さる程に、其の日も亦全く暮れ果てければ、彼の妻は再び夫に向
 ひ、さて四人どもは其の勸めに従がひけるやと尋ねたり。されば彼

の者之れに答へ、「げに彼等は情強はき惡黨にて、自から其の身を果
 たさんよりは、在らゆる艱苦を堪ゆる方勝れりと爲るなり」と云ふ。
 其時彼の妻の云へるやう、「此の上は明日彼等を城の仕置場に引き出
 だし、卿が今までに殺したる者共の骨や觸體を之れに見せ、今より
 ひと週りの過ぎざるうち、彼等も其の通り引き裂かるべき由知らし
 てやられよ」。

されば其の翌朝となりけるとき、大漢は再び出て來りて兩人を城
 の仕置場に引き出し、彼の妻の云ひ含めたる如く彼等に示して、さ
 て云ひけるやう、「是等の者ども、一度は汝等の如き旅人にて、又汝
 等とひとしく我が領分を侵したる者なるが、我れ期を定めて悉皆く
 之れを引き裂きたり。されば今より十日のうち我れ汝等をも其の通
 りに爲しやるべし、今はひと先づ元の牢屋に立ち返へれ」斯く云ひ
 て其の道すがら追ひ立て、彼の兩人を打ち叩きたり。さて此の

日は土曜日なりしが、兩人は前の如く日ねもす其の日も悲嘆のうち
 に暮してけり。其の夜の彼の妻疑念夫人は再び其の夫と囚人の事を語
 らひしが、大漢あまた度び首打ち傾むけ、「さるにても彼の者共の不
 思議さ、如何に打ち叩げども、また責め苛なめども、未だに死にも
 失せやらず」と云へば、彼の妻之れを聞きて、「さりとは何者かの
 助けに来るを待つことならん、それとも身に合鍵を隠し持ち、機を
 見て脱け出でんとも望めばこそ、斯く存らへても在ることならめ」、
 と云ふに彼の者打ち領づき、「我妻よ、其處には能くこそ氣付きたれ、
 さらば明朝は必らず彼等を探して見るべし」と打ち語れり。
 さて其の夜の半とも覺しき頃より彼の兩人は祈禱を始めしが、終
 に夜の明け放れんとする頃まで祈り續けてけり。
 かくて今しも愈よ日の出に近しと見えける頃、基督信者は宛なが
 ら眠りより驚ろきたらん人の如く、俄かに心焦燥ちて口走るやう、

「あゝ我れ我が胸の中に神の約束と呼べる鍵を有てり、此は懐疑の城
 中にて如何なる錠前をも開くべしと聞き及べり、さらば何時にても
 自由なる身となるべかりしを、さりとは今までも此の穢せき牢に
 在りつること、我れながら痴愚しき限りなりけり」と云ふに有望は
 忽ち喜び、「兄弟よ、それこそ善き音づれにてあるなれ、さらば早
 速取り出て試らみられよ」と云ふ。

其時基督信者は其の懐中より之れを取り出で、先づ牢屋の戸に當
 てがひ見るに、鍵の轉ぐるにつれて掛鐵おのづから外れ、戸も易々
 と開かれたれば、基督信者と有望とは共に外に立ち出でたり。次に
 城の中門に至り、等しく此の鍵にて其の戸を開き、愈よ進みて鐵の
 門をも通ほらんとするに、此處は其の固め極はめて嚴重なりしかど、
 猶ほ同じ鍵を以て開くことを得てしかば、急ぎ押し開きて逃げ出で
 たり。されど其の戸の廻轉りしとき、夥多しく軋る音の爲てしかば、

絶望入道忽ちに目を醒まし、さてはと驅け出で、之れを追はんと爲たりしが、折も節とて例の持病の發しければ、手足全く不隨となりて、また追ふことも叶はざりけり。されば兩人は落ち延びて漸やく王の街道に着き、是處に初めて彼の者の領内を離れ聊さか心を安んじけり。

かくて兩人は彼の石段を下り果てし時、あはれ後々より來らん者が彼の絶望の手に落ちざらんやう、此石段の邊にて、何とか防ぎ止むる由もがなと、互ひに工夫を凝らしてけり。やがて兩人は心を合はせ一個の柱を其處に築きて、其の側らに次の言葉を彫り付けたり。「此の石段を越ゆれば懷疑の城に至るべし、其城主は絶望入道とて、天の都の主を輕しめ、また其の聖き旅人を殺さんとする者なり。」斯かれば其の後ち此の記されたる事を讀みて、危難を脱かれけるも多かりけり。さて斯く爲し了はりて彼の兩人の歌ひけるやう、



堅忍な祈禱の鍵、能く懐疑絶望の門を開く



堅忍な祈禱の鍵、能く懐疑絶望の城門を開く

絶望入道忽ち目を醒まし、さてはと驅け出で、之れを追はんと爲たりしが、折も節とて例の持病の發しければ、手足全く不随となりて、また追ふことも叶はざりけり。されば兩人は落ち延びて漸やく王の街道に着き、是處に初めて彼の者の領内を離れ聊さか心を安んじけり。

かくて兩人は彼の石段を下り果てし時、あはれ後々より來らん者が彼の絶望の手に落ちざらんやう、此石段の邊にて、何さか防ぎ止むる由もがなと、互ひに工夫を凝らしてけり。やがて兩人は心を合はせ一個の柱を其處に築きて、其の側らに次の言葉を彫り付けたり。「此の石段を越ゆれば懐疑の城に至るべし、其城主は絶望入道とて、天の都の主を輕しめ、また其の聖き旅人を殺さんとする者なり。斯かれば其の後此の記されたる事を讀みて、危難を脱かねけるも多かりけり。さて斯く爲し了はりて彼の兩人の歌ひけるやう、

「あはれ旅人意して

正道を離るゝこと勿れ、

迷ひ行くては空恐ろしく

疑念の雲、憂愁の雨、

身に降りかゝり

望絶えなん」。

第八程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春をしぞ思ふ

さる程に彼の兩人は愈よ進み行きて、遂に可懐の峰に着きけり、
此は先きに云へる美麗宮の主が所有せる山なり。かくて之れに登り

て見渡せば、花園あり菓實園あり、また葡萄園あり清き泉あり、げに見る目も妙へに麗はしかるに、猶ほ兩人は意のまゝに葡萄を摘み、また清水を味はひ且つ其の身をも淨めてけり。さて此の山の頂きには數多の牧羊者ありて其の群を飼ひけるが、今しも此の街道の傍らに立ち居たりしかば、彼の兩人は之れに近づき、(疲れし旅人の能く途中にて爲る習ひ) 先づ杖に凭り掛りて、偕て言葉を交はし始めた

り。
兩人、「そも此の可懐の峰と云ふは誰れ人の所有ならん、また是處に飼はるゝは誰が羊なるべき。」

牧者、「是れなる山は我等が主インマヌエルの領地にて、其の都は是處より見ゆる處に在り、是れなる羊も亦主の有なり、げにや主は彼等の爲めに其の命を捐て給へり。」

基、「此は天の都に至る道なりや。」

①約翰十
二、一、
二、

牧者、「正しく其の通りなり。」

基、「是處よりの道程は如何ほどなるべき。」

牧者、「されば、眞實に志ざしある者ならずば、到底も猶ほ達せんこと覺束なき程なり。」

基、「さて道筋は安らかなりや、また危ふかるべきや。」

牧者、「安かるべき者には安かるべし、『されど罪人は之れに躓づかん』、ともあることなり。」

基、「さて、道中にて疲れ又は弱わりたる旅人などの、是處に助けを求むべき處なからずや。」

牧者、「げにや『遠人を待遇すことを忘るゝ勿れ』とは所の主が命令にて、元より此の處の善き物は皆な卿等の心任せなり。」

我れ猶ほ夢の中に見けるに、牧羊者等は彼の兩人が行旅人なるを見るにつけて、種々の事を問ひ試るみ、さて那方より來り、如何に

②何西阿
九、四、
ノ

③希伯來
二、三、
ノ

して此の道に入りたる、また、此方に來らんと思ひ立つ者は多かれ
 ぞ、さて此の峰まで登り來て顔を見する者は最と稀れくなるに、
 さりとては如何にしてか斯くまでの辛抱を爲し得たるなど、最と細
 やかに尋ねたりしが、(兩人は他所にても爲せるやうに、一々之れに
 答へければ)、彼の人々之れを聞きて喜ぶこと斜ならず、さも懐か
 しげにしげくと打ち眺め、さては言葉を合はせて、「あ、可懐の峰
 の名に適ひて、能くこそ懐かしくも來られつれ」と云へり。

さて彼の牧羊者等は其の名を智識、經驗、做醒、また誠實と呼ぶ
 者なりしが、孰れも彼の兩人を手引きして其の幕屋に請じ、折から
 備へ置ける物を分ちて之れを待遇しけり。猶ほ彼の人々は談を續け、
 「願ふは暫らく是處に逗留し、共々に親しみを増し、兼ねては可
 懐の峰の善き物を以て其の身を慰さむることをも爲られよ」と云へ
 ば、兩人も心置きなく之れを諾がひて逗留する由を告ぐる程に、其

の夜も甚く更ければ、皆なく休まんとて退ぞきたり。

さる程に、其の夜も漸やく明け渡れば、彼の牧羊者等は共に峰つ
 づきを散歩すべしとて基督信者と有望とを誘ひけるに、兩人も共に
 立ち出で、暫しが程は散歩しけるが、まことや山の兩側最と晴れや
 かにして、其の景色の妙なること云はん斗りもあらざりけり。其時
 牧羊者たち互ひに云へるやう、「いで旅の衆に所の不思議を見せ進ら
 すべし」かく語り合ひて先づひとつの峰に登りしが、此は誤謬の山
 と云ひて、其の後方は極はめて峻はしき絶壁なり。さて亦基督信者
 と有望とは指圖せらるゝまゝに其の谷底を見下ろせば、大方此の頂
 上より落ちたらん者と覺しくて、多くの人の粉微塵に碎けたる尸屍
 あり。基督信者は之れを見て、「此は如何なる仔細ならんと云へば、
 牧羊者たちは之れに答へて、「さても昔しヒメナヨとビレットが復生は
 既に過ぎたりと説くを聞きて、其の信仰を認まられたる多くの人あ

●提摩太
七、十八、

り、定めし卿等も其の事は知らるゝならん」と云ふ。兩人は亦之れに答へて、「其の事は能く知れり」と云へば牧羊者等も言葉を繼ぎ、「げに目のあたり微塵に碎けて横たはる者は皆な彼の人々の亡骸にて、また見らるゝ如く未だ取り片付くることも爲られざるは、全く後進の者の懲例と爲し、餘り高く登らんとする者、さては餘り近く此の山の端に近寄らんとする者を警戒めんとてなり」と打ち語れり。次に我れ見けるに彼の兩人は導びかれて他の峰に登れり、其の名は用心の山と云へり、是處に兩人は又指圖せらるゝまゝに迢けき方を打ち眺めて、臆ろ氣ながら數多の人の唯或る墓場の中に彷徨へるを見たり。而かも其の人々は皆な盲目と覺しくて、幾多加墓石に躓づき倒ふれつゝも、猶ほ其の處を出づること叶はず、空しく右往左往に狼狽へ廻はるに、基督信者は之れを見て、「是は亦如何なる仔細ならん」と云ふ。

其時牧羊者等は之れに答へて、「されば、此の山の麓に當り、道の左り手に一とつの野原あり、げに卿等は之れに越え行くべき石段あるを見られざりしや」と云ふに兩人は頷づきて、「まことに之れを見たり」と答ふれば、かの牧羊者等は言葉を繼ぎ、「さて彼の石段を越ゆれば小徑ありて直ちに懷疑の城に至るべく、其の城主と云ふは絶望入道なり。さても彼の者どもは、(と云ひつゝ墓場の中なる人々を指さし)元は卿等と等しく都詣での道中に出で立ち、彼の石段までは首尾よく進み來れるなり。然るに義しき道筋は彼處に差し掛りて最と難澁なるより、遂に道を離れて彼の野原に移りければ、忽ち絶望が手に捕らへられて、懷疑の城に投げ込まれたり。斯くて暫らく牢屋の苦しみを嘗めたる後ち、大漢の爲めに其の眼の球を剝り抜かれ、また彼れなる墓場に放たれて、今日只今に到るまで斯く狼狽へ居る始末なり。是れや誠に古しへの賢き箴言に、『悟明の道を離る

る人は、死にしもの、集會の中に居らん』と云へるに適へるならずや』と打ち語る。

基督教者有望とは聞き了はりて互ひに顔見合はせ、はふり落つる涙を止ごめあへざりしが、然るにても牧羊者等には猶ほ何事も云はで在りたり。

次に亦我れ見けるに、牧羊者等は彼の兩人を導びきて、麓の方なる他の處に到りしが、是處には山腹を穿ちて立てられたる入口あり、さて其の戸を押し開きて之れを見せたり、されば兩人は近寄りて差し覗くに、其の内部最と暗くして黒煙充ち、また火の燃ゆる如き烈しき音の轟るくに連れて、何者とも知れず責め苛なまるゝ者の叫び聲聞こえ、さては硫黄の香さへも嗅がるゝやうに覺えてけり。基督教者は之れを見て、「此も亦如何なる仔細ならん』と云へば牧羊者等の語るやう、「是れこそ地獄の問道にて、多くの偽善者の通る處なり。

十五ノ世三
十五ノ世三
十六ノ世二
十六ノ世二
十六ノ世二
十六ノ世二

げにやエサウに倣ひて長子の業を賣る者、ユダに倣ひて其の主を賣る者、また銅匠なるアレキサンデルに倣ひて福音を誇り譎す者、さてはアナニヤと其の妻サツピラに倣ひて其の伴はりを紛らさんとする者など、皆な此の中に行くことなり。

其時有望は牧羊者等に向ひ、「まかし彼の人々も今我等が装ほへるやうに、確かに一人として都詣での假裝を爲さゞりし者は無かりしやう覺ゆ。

牧者、「其の通りなり、而かも長き間其の俗裝を續け居たり。

有望、「それにも似合はず、斯く淺ましくも滅ぼされたる處を見れば、彼等の進みたる路程とては當時およそ如何斗りなりしならん。牧者、「されば或る人々は此の峰を通り越したるもあり、或るは亦左ほごならぬもありつるなり。

彼の兩人の旅人は之れを聞きて互ひに云へるやう、「さては我等も

力を得んため、力を有ち給ふ者に呼ばり求むべきことなり。」

牧者、「げに云はるゝ通り、亦其の力を得ば必らず之れを用ゆべきなり。」

さる程に彼の旅人等も今は早や其の道を通りて云ひ出でけるに、牧羊者等も其の儀然るべしと思ひければ、共に進みて峰つゞきの盡きなんとする方に伴ひ行けり。其時牧羊者等互ひに語らひて、「若し此の旅人たちが能く我等が望遠鏡の使ひ方を心得居らんには、是處にて天の城門を示すべし」と云ふに、兩人も甚く其の厚意を悦びしかば、やがて麗朗の峰と呼べる高峰に導びき行き、其の望遠鏡を交してけり。

さるからに彼の兩人は眺めん者と努たりしが、かの牧羊者等の最前に見せける事ども心に浮びて、其手おのづから打ち震ひ、それが爲めに妨げられて定かには見ると叶はず、されど猶ほ何やらん城門

とも覺しきもの、さては亦其處の榮光ある有様など、そこはかど見づる様の心地してけり。やがて兩人は歌を歌ひて別れ行きたり。

「高峰迢かに世離れて

羊を牧へる人を訪へ、

やがて啓くや其の心

幾世盡させぬ秘事や

深き悟道も自づから」

さて愈よ別れに臨みける時、牧羊者等の一人は彼の兩人に道の案内記を興へ、次なるは兩人を警戒めて、諂らふ者を慎しまれよと云ひ、第三の者は同じく之れを諫めて、妖幻の土地にては眠らざるやう用心せられよと告げ、最後の一人は道中恙無かれかしと挨拶す。折しもあれ我れ端無くも我が眠りより目醒めてけり。

第九程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春をしぞ思ふ

やがて我れ又た打ち眠りて、再び夢の續きを見てけるが、彼の兩人の旅人は愈よ峰を下り、都をさして街道を進むと見たり。さて此の山の左方に當り、其の麓より程遠からぬ處に、自滿の國と云へるが在り、此の國よりひとつの歪み曲りたる横道つきて、旅人等の通へる道筋に出でたり。さるからに彼の兩人は是處に通じ掛りて一人の若者の其の國より出で來るに會ひたりしが、彼れは其の名を愚昧と云ひて極はめて輕卒なる男なり。されば基督信者は之れに向ひ、さても那方より那方には行かるゝぞと尋ねてけり。

愚昧、「君よ、我身は此の道の左方に當りて程近き、彼れなる國の産なるが、今しも天の都に志ざす處なり」。

基、「天の門に入るには容易ならずと云ふ事なるに、卿は如何にして其れに入るべしと思はるゝぞや」。

愚昧、「他々の善人同様ならば申分は無からん」。

基、「されど如何なる物を見せて、其の門を通して貰はんとは爲らるゝぞや」。

愚昧、「我身は主の聖意を知り、又今まで善人の生涯を送りて、他人の物を犯さず、祈ることをし、斷食をし、得る處の十分の一を神に捧げ、また布施を爲し、さては此の志願の爲めに我が故郷をも見棄てたり」。

基、「まかし卿は此の道の入口なる彼の片折戸よりは來らずして、其處なる歪み曲りたる横道より入り來れり、然らば卿自づからは如

何やうに思はるゝか知らねども、やがて審判の日來らんととき、恐らくは卿も盗人なり強盜なりの罪に定められ、中々都には入れられまじ。

愚昧、「方々よ、我れは元來卿等を知らず、全く異邦がらの仲なれば、卿等は卿等の宗旨に従がはるべく、我れは亦我身の宗教を守らんのみ、夫れにて充分なりと思ふなり。さて亦卿等の語らるゝ窄き門は、我が故郷より最とく遠く離れ居ること、世皆な舉りて知る處なり。思ふに我が近在の者の中に、其の處に到る途をだに知る者は一人も無からん、されど知るも知らぬも何の頓着することかは、見らるゝ如く我等には青葉茂れる此の心地よき横道あり。而かも此は我が國より此の道筋に出で來る唯だ一と股ぎの近道にて在るなり。」
其時基督信者は此の人の然も賢こげに自慢するを見て、有望に耳打ちしけるやう、「げにや『おのれの目に自からる智慧ある者とす

①福音二
二十六ノ十

②傳道書
十ノ三

人を見よ、彼れよりも却つて愚かなる人に望あり」とあるならずや、と云つゝ更に言葉を繼ぎ、「また『愚者は出て途を行くに當りて其の心足らず、自己の愚なることを一切の人に告ぐ』ともあることなり。如何にや、我等猶ほ此の者と語らはんか、それとも暫らく此の者を離れ行き、先づ今まで語り聞かせつる事を考がへさせ、其の上にて亦彼れを待ち受け、追ひ〜に論じてやるやう爲て見んか」と云ふ。
有望は之れを聞きて、

「心の眼且つ拭ひても

深き悟道を探ぐれかし、

愚昧なる身の行く末知らば

自滿の迷ひ先づ棄てよ。」

かく口ずさみつゝ更に言葉を添へ、「げにや今一度に語り聞かせたりとも益なかるべし。さらば卿の意に任せて暫らく彼れを離れ行き、

さて機を見て其の『負ふことの出来るくらゐ』づゝ語ることをすべし』と云へり。

さる程に兩人は前に進み行き、愚味は又其の後に従がひしが、未だ遠くも離れざる頃、兩人は唯或る最と暗き細道に差し掛りたり。折しも七個の悪鬼に捕らへられたる人ありて、七條の荒繩に其の身を縛られ、彼の山の側りにて見たりける地獄の入口に引かれ行くに出で遇ひたり。基督信者は之れを見て憐れにも身震ひし始めけるが、有望とても同じく恐れ戦のき居たり。されど悪鬼共の此の者を引き行きける時、基督信者は振り回へりて誰れなるべきと眺めやりしに、彼れ宛ながら捕らはれたる盗人のやうに、其の頭を頂垂れ居りしかば、顔は定かに見えざりつれど、多分背道の里に住める變心者なるべしと思ひたり。尤も有望は其の行き過ぐる後ろ影を見やるとて、其の背の上に、『此は名打ての放埒者にて、道に背ける大罪人なり』と書き流したる粘紙あるを見出で、けり。

其時基督信者は彼の同伴に云へるやう、「我れ今想ひ出でたる事あり、そは此のあたりにて或る善人の身に降りかゝりし災難の話なるが、抑も其の人は名を薄信者と呼び、まかし善人にて眞實の里と云ふに住ひたり。さて是れなる通路の取り付きに當りて、廣門通と云へるより續き來れる横道あり、是處は常々人殺しのある處なれば、其の名を死出の小路とは名付けたり。さて亦此の薄信者は我等と等しく都詣での道中なりしに、圖らずも是處に憩ひて居眠りしけり。折しも廣門通より此の横道に來掛りしは、揃ひも揃ひし三人兄弟の悪黨にて、其の名を志弱、猜疑、また罪科など云ふ者なりしが、斯くと見るより忽ち足を飛ばせて薄信者の方に驅げ寄りたり。其時彼の善人は丁度眠りより起き出で、今しも其の道に出で立たんとする處なりければ、彼の者どもは有無を云はせず取り圍み、身動きすな

と嚇し付けたり、薄信者は此の有様に仰天して顔色さながら土の如く、抵抗はんに力なく然りとて逃げんことも得せざるに、志弱先づ聲を掛け、「いざ財布を渡せ」と云ふ。されど（元より其の錢を失なふことは嫌なりしかば）、兎角に惜しみて出さざるを、猜疑は面倒なりと握み掛りて、其の懐中を掻き探ぐり、やがて銀貨の一袋を奪ひ取りたり。されば彼の人々を見て、「盗賊々々」と大聲に呼ばりけるに、罪科は亦其の手に持てる太き棒を振り上げ、またか薄信者の脳天を打ちしかば、忽ち地上に叩きのめされ、血しほの流るること夥多しくして息も絶ゆべくやと思はれけり。其の間彼の盜賊等は其傍らに立ちて在りしが、稍やありて此方に來る人の足音を聞き、此は定めし篤信の里の偉丈夫なるべしとて、皆な我れ先に踵を轉らし、彼の善人を後に殘して逃げ去りたり。さて暫らく立ちて薄信者は漸やく我れに返へり、蹣跚しながら辛くも其の道を續けた



薄信者は終に幸不生一てしを人は行窮信薄

と嚇し付けたり、薄信者は此の有様に仰天して顔色さながら土の如く、抵抗はんには力なく然りとて逃げんことも得せざるに、志弱先づ聲を掛け、「いざ財布を渡せ」と云ふ。されど元より其の錢を失なふことは嫌なりしかば、兎角に惜しみて出さざるを、猜疑は面倒なりと握み掛りて、其の懐中を掻き探ぐり、やがて銀貨の一袋を奪ひ取りたり。されば彼の人々を見て、「盗賊や々」と大聲に呼ばりけるに、罪科は亦其の手に持てる太き棒を振り上げ、またか薄信者の脳天を打ちしかば、忽ち地上に叩きのめされ、血しほの流るること夥多しくして息も絶ゆべくやと思はれけり。其の間彼の盜賊等は其傍らに立ちて在りしが、稍やありて此方に来る人の足音を聞き、此は定めし篤信の里の偉丈夫なるべしとて、皆な我れ先きに嘘を轉らし、彼の善人を後に残して逃げ去りたり。さて暫らく立ちて薄信者は漸やく我れに返へり、蹠踵きながら辛くも其の道を續けた



むしら終に幸不生一てしな人は行弱信薄

りと云ふ話なり」。

有望、「其の盜賊等は彼の人の所有品を掠め盡しけるにや」。

基、「いや、彼の者共は其の寶物を入れ置きたる處は探し見ざりし由にて、夫れ丈けは残りとなり。されど我が聞けるには、彼の善人は其の路用の大方を取られたるに依り、甚く難儀したりと云ふとなり。(今も云へる通り) 取り残されしは唯だ寶物と僅か斗りの端錢のみなりしかば、到底も道中を終るまでには足らざりけるなり、いや、いや、(我が聞きしこと違はずば)、彼の人の寶物は賣るに賣られず、餘儀なくも道々袖乞ひを爲てけるとなり、げに乞食もし又何でもしと云ふ次第にて、空腹き目を見ながら残りの旅を行きたりと云ふことなり」。

有望、「其の通券を奪ばれざりしと云ふは不思議ならずや、それこそ天の城門を通ほるには無くてならぬ寶物なるべきに」。

●提摩太
後一ノ十
四、彼得後二
ノ九

基、實に不思議なり、されど之れを奪ばれざりしは、彼の人の機轉に依るにあらず、抑も賊に取り圍まれし時、忽ち其の度を失なひて、抵抗ふことも物を匿すことも中々爲し得ざりし程なれば、是れ全く其の骨折りに依ることならず、神の攝理に依るなるべし。

有望、「其の寶物の残りし丈けは責めてもの心やりなりしならん。」

基、「其の通りなるべき筈なり、然るに我が聞きつる處にては、彼の人其の金錢を奪ばれたるに氣を落し、夫れが爲め残りの道中にて此の寶物を用ゐたること極はめて少なく、大方打ち忘れたらんやうにて、偶ま思ひ出で、之れを讀みもし慰さみもし爲んとすることあるも、忽ち亦盜難の損失を思ひ起して、却つて其の爲めに心を亂しけるとなり。」

有望、「さりとは憐れむべき次第なり、それこそ却つて其の愛ひをば増したるならぬ。」

基、「愛ひとや、然なり實に愛ひなり。げに卿にても、我身にても、斯く強盜に遇ひて傷を受け、而かも斯かる不案内の處にて彼の人の様なる目に遇ひたらんには、到底も愛ひすには居られざるべく、さては、あはれ彼の人が愛ひの爲めに死なざりしこそ、寧ろ不思議とも云ふべきなれ。また我れ聞きけるには、彼の人其の残りの道すがら一向悲しく恨めしげなる嘆ちことを云ひ散らし、且つ誰れにても道にて追ひ付かるゝか、又は追ひ付くか爲たる者に向ひては、直ちに盜賊の話を爲し、其の場所や其の有様や、盜まれ物、傷を受けたること、さては命からゝ遁れたることなどの顛末を語りけることなり

有望、「さほど難澁なる目に遇ひたらば、彼の寶物を賣るか質入れするか爲て旅の事をも足すべかるに、其れを爲さざりしと云ふは最と不思議なり。」

基、「此は宛ながら生れたての黄雛に似たる云ひ分ならずや、之れを質入れしたりとて何をか得べき、また誰れ在りてか之れを買はん、彼の賊に遇ひたる近在にては斯かる寶物は一文の値打ちも無く、且つは彼の人とても之れを無くしてまで路用を得んとは欲はざりけるなり。抑も天の都に至りたるとき其の門前にて此の寶物を持ち合はせざらんには、忽ち追ひ出だされて鬮業を受くること叶はざるべく、(之れ元より彼の人の能く知れるところ)、かくては千萬の盜賊に遇ひて憂き目を見るよりも、猶ほ迢かに憂たてかるべしと思ひけるなり。」

有望、「兄弟よ、卿の言分とても随分皮肉ならずや、抑もエサウは僅かに紅藥一椀の爲めに長子の家督を賣れり、而も其の家督は彼れの最も大切なる寶物にてありけるなり。さらば彼れとても此くするからは、況して薄信者の賣られぬと云ふ筈は無からん。」

六十二番伯來

基、「げにエサウは其の家督を賣りたり、其の他にも斯かる事を爲す者數多く、之れ亦彼の鄙しき男のやうに、皆み大切なる神の恩恵より自から離るゝなり。さて卿先づエサウと薄信者との人格や、並びに其の持物とに區別を立つべし。エサウの家督と云ふは擬らへ事にて、薄信者の寶物と云ふは其の様の者に非ず、エサウは其の腹を拜み物としつれど、薄信者は然らず、エサウの欲ひは肉躰の慾なりしも、薄信者の欲ひは然らず。エサウは其の慾を充たさん爲め全く眼も眩み果て、「我れは死なんとして居るに、此の家督の權我れに何の益を爲さんや」と云ひたり、されど薄信者は、元來唯だ僅か斗りの信仰を有てる身なれど、僅かながらも其の信仰に依りて、斯かる濫妄なることを爲さず、又其の寶物を大切に思ひてエサウに倣ふことは爲ざりけるなり。さてもエサウが信仰を有ちたりとは苟そめにも聞き及ばざることならずや、實に彼れは僅か斗りだも有たざり

十五創世三

しならん、さらば肉慾のみ盛んなるからは、縦し其の家督も其の靈魂も、また何もかも賣りて、而も之れを地獄の鬼に渡すと云ふとも、(元より信仰なき人には身を制すること難き習ひなれば) 何の訝しむことも非ざるべし。げにや斯かる人々は、「その欲の動く時、誰れか之れを止め得ん」と云はれたる牝驢馬の類ひにて、其の心動きて其の慾を追ふときは、其の報いは如何やうにもあれ必らず之れを遂げんとするなり。然るに海信者の方は之れと其の性質を異にせり、其の心は聖き事に向ひ、また靈なる物及び天に屬ける物を以て自ら養ひ修むる事を爲せり、さらば斯かる性質の者にて何とて其の寶物を賣り、(縦しや買ふ者のありたりとも) 之れを空しき物に代へて心を満たさんとする如き事を爲さんや、げに其の腹を肥やさん爲めなりとも、錢を出して馬草を買ふ者は無かるべく、また鳩は如何に教へ込みたりとて、鳥の如く尸肉を啄むことを爲し得んや、元よ

耶利米
二四、二

り信仰なき者は其の持物を質入れもし、貸借もし、或ひは賣り拂ひもし、また利益の爲めには随分猶豫なく自分の身をも渡すことなるが、信仰ある者は全く然らず、たとへ僅か斗りなりとも其の信仰に依りて之れを保つなり。されば兄弟よ、卿の誤まてりと云ふは是處の事なり。

有望、「合點が往きたり、されど卿の云ひ分餘り皮肉の様覺えたるまゝ、ツイ言葉に角を立てなんとせり」。

基、「さて、我が卿を黄離に比べたるは、其の生れ立てのまゝにて處嫌らはす彼方此方と驅け廻はる最と敏捷き方を云ひたるまでなり。其れは兎も角もとして、今まで語らひし處を考がへ見なば、我等の間に蟠まりも無かるべし」。

有望、「それは偕て措き、基督信者ごのよ、我れは彼の三人の奴輩を確たか臆病物の一群なりと思ふなり、さもなれば通り掛かる人の

足音を聞きて、かく逃げ出すことも無き筈ならずや、また彼の薄信者とても何とて今少し大膽に立ち向はざりけん、責めて一と揉み合ひ爲たる上にて、力盡きたらば降参も爲べかりしをと考がへらるゝなり」。

基、「人々は多く彼の者共を卑怯者なりと云ふことなるが、さて幸と云ふ時になりては存外に斯くも得云はぬ人亦多かり、別けても薄信者などは膽力とては露斗りだも有つことなし。さて兄弟よ、卿の云はるゝ通りより見れば、卿もし處を代へて彼の人なりしならんには、必らず敗くるまでも一と抵抗ひは爲さるゝならん、さても、今盜賊の邊り近くに在らざればこそ、卿も腹一杯の事は云はるれ、若し彼の者共目前に立ち顯はれ、彼の男に爲しつる様の事をも爲さば、或ひは卿も別の考がへを起さずとも云ひ難からん。亦思ふても見られよ、彼の者共は唯だ日備働らきの盗人にて、實

●彼得前
五ノ八、

は奈落の王の手下なるが、何時にてもあれ事ある時は、彼の王親づから出で來りて之れを援くるなり、而も其の聲は宛ながら獅子の吼ゆるに似たり。曩に我身も親しく此の薄信者と同様の目に遇ひて、恐ろしかりける次第ぞと思ひてけり、初め彼の三個の惡漢に圍まれしかば、我れ直ちに基督信者らしく抵抗ひし始めけるに、彼の者共僅かに聲を揚げたるよと思へば、早や其の王は立ち現はれたり。げに風前の燈火とも云ふなるは我が其の時の身の身の上なりしが、倖ひにも神の聖意に依り、我が身には堅き甲冑を着け居たり、されど斯く固めは爲し居り乍ら、猶ほ男らしく振舞ふこと中々難儀と覚えしことなり。げに其の身親しく此の戦ひに臨める者ならずは、誰れとて其の戦争ぶりを知り得べからん」。

有望、「左程の後援を持ちながらも、僅かに偉丈夫とやらんの來掛りたりと思ふ斗りにて、疾くも彼等は逃げたるならずや」。

基、「まことや彼の偉丈夫をひと目見れば、彼の者共も亦其の主人も常に逸早く逃げ去ることなり、抑も彼の方は我が大君の勇將なれば、之れ些さかも訝しむに當らぬなり。さて卿は此の勇將と彼の薄信者との間に然るべき區別を立てらるゝなるべし、元より大君の臣下なりとても悉皆くは勇將にあらず、また率と云ふ時に臨みて皆な彼の人の如く奇功を立てんことも叶はざるべし。昔しゴライアテを殺したるダビデの振舞は、幼な童の皆な能く爲し得ん筈もなく、婦鳥に牛の車を引かさんこと思ひも寄らぬ次第なるべし。或る人々は力強く、或る人々は力弱わし、信仰篤き者あり、また薄き者もあることなり。さて此の人は其の力弱き者の一人にて在りしかば、さてこそ脆くも敗けたるなれ」。

有望、「あはれ偉丈夫の方にて在りしならんには、と思ひやられて惜しきことなり」。

① 後多
② 一多
③ 四耳
④ 十四
⑤ 下三
⑥ 上三
⑦ 全十
⑧ 八下
⑨ 詩八
⑩ 馬太
⑪ 九六

基、「よしや彼の方にてありたりとも、随分手に餘ること無しとも云ひ難し、げに彼の偉丈夫は劍術の達人にて、劍にかけて拒ぐ間は充分敵に當ることを得るなり。されど志弱にもあれ猜疑にもあれ、其の他の類ひにもあれ、一旦其の内に入り込む時は、それこそ實に一大事にて、遂には其れが爲めに打ち倒さるゝに至らん、さて倒ふれたらば云ふまでもなく如何にも爲し難かるべし。

誰れにても偉丈夫の顔をしみと眺めたらん者は、其の上に數多の突傷切傷あるを見るべく、斯くて我が云ふことの偽りならぬを容易く覺るべし。げにや我れ聞けることあり、そは彼の人必らず聲を揚げ、(元より戦かひの最中にて)『生命を保たん望みをも失なへり』と云ふなるべし。またダビデも斯かる頑強き惡黨ばらの爲めに惱まされて、呻めきもし嘆きもし又唸りもしたることなり。さて亦マンヤヒゼキヤも夫れ其の時代の勇將にて、彼等の襲ひ來りし

時奮ひ起りて戦かひしが、而も兩人とも確たか其の甲冑を打ち碎か
れたり。彼のペテロとても時には思ひ切つたる事を爲す人にて、衆
人は彼れの事を使徒等の頭なりと云ふ程なれど、矢張り彼の者ども
に攻め立てられては、遂に賤しき下女をさへ怖はがる者となりたる
ことあり。

且つ亦彼の奈落の王と云ふは、常に彼の者共を離れずして、呼子
の笛を聞き過まつことなく、何時にても味方危ふしと云ふ時は、大
概出で来りて彼の者共を援くるなり。げにや、一劍をもて之れを撃つ
ども利かず、鎗も矢も漁叉も用ふる處なし、之れは鐵器を見ること
藁の如くし、銅器を見ること朽木の如くす、棒も之れには藁屑と見
ゆ、鎗の閃めくを之れは笑ふ』と云はれたるは彼の者の事なり。斯
からん者に向ひて誰れとて何事をか爲し得べき、さらば又『その頸
に勇ましき馬鬣を粧ほひ、其の飛ぶこと蝗虫の如く、其の嘶く聲の

約百四
十一、十二、
十六、十九、

約百三
十九、二十、
二十五、

響は凄まじく、谷を脚爬きて力を逞しうし、自から進みて兵士に向
ふ、懼るゝことを笑ひて驚ろく處なく、劍に向ふとも退ぞかず、矢
筒其の上に鳴り、鎗に矛相ひ閃めく、猛りつ狂ひつ地を一呑にし、
喇叭の聲鳴り渡るも立ち止ごまることなし、喇叭の鳴る毎にハハ
と云ひ、遠方より戦鬪を嗅ぎつけ、將帥の大聲および呐喊の聲を
聞き知る』と云はれたる彼のヨブの馬に乗ることを得、また巧みに
之れを乗り廻はして其の勇を奮ふことを得ば、或ひは目醒ましき功
を顯はし得ることもやあらん。

されど卿や我身の如き徒歩の者に取りては、斯かる敵に出遇はん
こと忌々望ましきことにあらず、また他人の之れが爲めに打ち敗け
たるを聞きたりとて、左のみ自から高ぶりて侮ざるべきことかは。
我れと我身を強がりて北叟笑む者は、存外其の場に臨みて却つて他
人より穢なき敗を取るならひなれば、斯かる思ひは能く〜慎しむ

べき事なるべし。我が前にも云へる彼のペテロを見られよ、彼れは
傍若無人の言を放ち、其の高慢の心まかせに大言を吐き、たとへ凡
ての人は主を捨つることも我れは死に至るまで主の爲めに盡すべしと
まで云ひ乍ら、率ざ其の悪黨等と戦かふとなりては、他一倍の穢な
き敗れを取り、散々の爲躰となりたるならずや。

されば我が此の大君の街道にも斯かる賊難ありと聞くからは、宜
しく兩つの事を心掛くべし、先づ甲冑にて身を固め、また確と楯を
携さふる事なり。昔し人ありて彼の疾く走る蛇レビヤタン、曲り迂
ねる蛇レビヤタンと云へる者に向ひ、強剛く戦ひて猶ほ勝つことを
得ざりけるは、全く此の用意なかりしに依るなり。げにや此の用意
無からんには彼の者は我等を物の數とも思はざるなり。されば戦か
ひに心得あるもの此の事に就きて云へることあり、「此のほか信仰の
楯を取るべし、此の楯をもて悉皆く悪しきもの、火箭を滅すことを

以賽亞
二十七ノ

詩二十
三篇
出埃及
三十三ノ
十五、三ノ
六、二十七
全二十七
ノ、一、十
三、以賽亞
十、四

得ん』と。

次には又、我等宜しく大君の保護を仰ぎ、其の親しく我等と共に
行き給はんことを望むべきなり。昔しダビデが死の蔭の谷を歩みて
猶ほ悦びしも之れ故なり、またモーセは神共に歩むことを爲し給
はずば、立ちどころに死ぬる方勝れりと爲せり。あゝ兄弟よ、まこ
とに神若し我等と連れ立ち給はんには、たとへ幾千の者攻め掛かる
ども我等何をか恐るべき、されど共なり給はずば、如何に強からん
助者ありとも皆な殺されたる者の下に伏し仆れんのみ。

我身とては巖に親しく苦戦をなせしも、見らるゝ如く今猶ほ無事
に存らふることなるが、之れ全く彼の勝れ給ふ者の慈悲に依ること
にて、決して己れの勇に誇るべくもあらず。此の後ち又斯かる憂き
目に遇ふことなからんには、如何ばかりか嬉しかるべきを、猶ほ我
等は全く危難を越え了はれりとも思はれず。さり乍ら獅子にも熊に

も屠らるゝことなくて今まで無事に來りしを思へば、神は猶ほしも我等を守りて、次の割禮なきペリシテ人より必らず救ひ出し給ふなるべし」と語り了はりて基督信者の歌ひけるやう、

「心せよ

世の白波の立ちさわぐ

危ふき船路渡るごき

信薄からは如何にして

向ふ入江の春に逢ふべき」。

斯くて彼の兩人は進み行き、愚味も亦其の後に従がひしが、程なく唯或る處に出でたり、是處は其の道兩つに分れ、那方が本道にて那方が岐路なるや、共に眞直に見えて孰れを行くべしとも覺えざりければ、兩人は是處に立ち盡して如何にすべきと考がへ居たり。折しもあれ、一個の人の其身は極はめて黒けれど、最と輕き白妙の

羽衣を着けたるが、ゆくりなくも兩人の前に出で來り、さして卿等は何とて是處に佇立むやと尋ねたり。兩人は之れに向ひて、天の都に志ざす者なれど、孰れの道を取るべきか知らざる由を答ふれば、其の人兩人をさし招き、「さらば我れに従がはれよ、それこそ我が志ざす方なれば」と云ふ。さる程に兩人は之れに従がひて進みしに、其の途次第々々に曲りくねりて、何時しか志ざしの都より遠ざかり、途には全く其れに背むける處へ出でたれど、兩人は之れを悟らずして猶ほ其の跡を慕ひ行けり。やがて其の人は張り構へたる網の中に彼の兩人を連れ込みしかば、忽ち之れに引き絡まりて全く途方を失なひたり、それにつれて看るゝ白き衣は彼の黒き人の肩より脱け落ちたり。其時兩人は初めて事の始末に心付きしが、さりとして今は早や遁れんことも叶はざれば、暫し其處に伏し轉びて大聲に泣き居たり。

されば基督信者は其の同伴に云へるやう、「あゝ我れ今となりて我が失錯を思ひ知りたり、彼の牧羊者等の云ひ付けには、諂らふ者を慎しめよと云へるならずや。賢き人の箴諺にも、『その隣りに諂らふ者は彼れの脚の前に網を張る』とあり、我等今日其の意を悟り得たり」。

有望、「其の上我等は道中の案内記をも授かり、之れさへ見れば間違ひもなき筈なるに、我等却つて之れを讀むを怠たり、果ては『暴ぶる者の途』をさへも避けざりけるなり、さりては『人の行爲の』ことを云は、我れ汝の口唇の言によりて、暴ぶる者の途を避けたり、と云へる彼のダビデこそ、迢かに我等よりは賢こかりけれ」。

斯く兩人は嘆きつゝ網の中に悶へ居りしに、稍やありて何處よりともなく一個の輝やける者出で來り、其の手に細き紐の鞭を取りて兩人の方に近づくを見出でたり。其の者やがて兩人に向ひて、さて

詩十七
ノ四

●哥林多
後十三、一ノ
十五、一ノ
但十五、一ノ
二、八、三、十

那方より來り、また此の始末は何事ぞやと尋ねてけり。されば兩人は之れに答へ、實は旅の者共にシオンシオンの山に志ざす者なるが、途にて白き衣を着たる黒き人に陵のかされ、其の云ふまゝに従がひて憂たてくも是處に來れる由を告ぐ。其の時彼の鞭を持てる者の云へるやう、「それこそ『光明の使の貌に變じたる偽はりの使徒』にて、名を追従者と云ふ者なれ」かく云ひつゝ其の者忽ち網を引き裂きて彼の兩人を出だしやり、「さらば再び本の道に連れ返へるべきに、率ざ此方に従がふべし」と云ふ。斯くて兩人は導びかれて漸やく彼人の諂らふ者に誘ひ出だされし處まで歸へり行きしが、其時彼の者は兩人に向ひて、「さて昨夜は那處に泊りしぞや」と尋ぬるに、兩人は答へて、「可懐の峰なる牧羊者等の許に宿りたり」と云ふ。「さては彼の牧羊者等より道中の案内記を受けざりしや」と云はるゝ通り貰ひ受けたり」さらば彼の岐路にて躊躇ひける時其の案内記を取り出して

羅馬書 十六、十八、十九

歷代志下 十六、十七、十九

讀みたりしや、「いや其の事は爲ざりしなり」。「そは又何ゆゑぞや」。「耻かし乍ら忘れ居たり」。之れを聞きて彼の者更に尋ねけるやう、「彼の牧羊者等は卿等を戒しめて、諂らふ者を愼しめよとは云ひ含めざりしや」。「如何にも其の如く云ひ付けられたり」と答へつゝ、兩人は猶ほ言葉を繼ぎ、「されど此の言巧みなる者を彼れなりとは誰れか思はん」と打ち語れり。

さる程に、我れ夢の中に見けるに、彼の者は兩人を命じて地の上に伏させ置き、さて其の歩むべき善道を教ふるごとて、傷々しくも彼の兩人を打ち叩きたり。また懲らしめ乍らも之れに向ひて云ふ、「すべて我が愛する者は我れ之れを責しめ之れを懲らす、是故に汝勵みて悔い改ためよ」と。斯く爲し了はりて彼の者は兩人を道に打ち立たせ、且つ彼の牧羊者等より受けたる他の指圖をも能く守るべしと云ひ含めてけり。其時兩人は懇ごろに其の親切を謝し、やがて歌ひ

つゝ、静かに義しき道を進みたり。

「二た道かけて行く人は

諂らふ者の網に落ち、

身の警戒を怠たらば

身を懲戒の鞭痛し」。

さて幾程もなく彼の兩人は、此の街道の向ふより唯だ一人此方を指して徐むろに來る者あるを見たり。されば基督信者は其の同伴に向ひ、「あれ、シオンの方に背を向けて、我等に近づき來る人あり」と云へば有望打ち領づき、「我れも已に其の人を見たるが、之れ亦諂らふ者の類ひならずとも受け合ひ難ければ、今度は随分用心すべきなり」と云ふ。兎角する間に彼の者次第々々に近づきて、遂に兩人の前に來れり、彼れは其の名を無心論と名乗り、さて兩人に向ひて那方に往かる、やと尋ねてけり。

基、さればシオンの山に志ざす處なり」。

無神論は之れを聞きて物をも云はず唯だ笑ひに打ち笑ふ。

基、「何とて卿は左のみ笑はるゝや」。

無神、「げに斯くも辛らき旅路を續け、而かも其の果ては骨折り損

の疲倦儲けと云ふ外なし、さて〜我れは卿等の愚を笑ふなり」。

基、「さては我等を天國に行き得ぬ者と云はるゝか」。

無神、「天國とや、あはれ〜卿等が夢に見るやうなる處は、此の

世の中に絶えて無し」。

基、「されど來らんとする世には在るなり」。

無神、「我れ猶ほ故郷に在りける頃、卿等が今云はるゝやうの事を

聞き、耳ならず聞くに任せて家を立ち出で、此の二十年が間其の都

を尋ねたり、されど今に至るまで其の在所を見ざること猶ほ首途の

日に變はらざるなり」。

●傳道十
ノ五道十
ノ七利米亞
ノ十五

基、「まかし我等は斯かる處の在所に就きて、確かに聞きもし又信
じもすることなり」。

無神、「元より我身とても家に在る頃同じく之れを信じたればこそ、

斯く迢々と出掛けも爲つれ、されど(げに在りさへすれば、我れこ

そ卿等よりは遠くまでも行きたることゝて、猶ほ道行を續くべけれ

ど)未だにひとつとして見當らざれば、今は元の處に歸へり行かん

とする處なり。あゝ其の爲め多くの物を捨て、得んとせし望みも今

は空しければ、再び昔しに立ち返へり、彼の時捨てたる物を取りて

自から樂しまんと思ふなり」。

基督信者は之れを聞きて其の同伴なる有望に云へるやう、「此の人

の云ふ處は眞實なるべきか」。

有望、「用心せられよ、之れも諂らふ者の一人なり。曩きに斯かる

奴輩の云ふ事を聞きたる爲め、何たる目に遇ひたるか思ひ見られよ、

●哥林多
後五ノ

●箴言十
九ノ
希伯來十
九ノ

●約翰二
十一ノ

さるにてもシオンシオンの山山無しとは何事何事ぞや、我等我等は可懐可懐の峰峰より其其の都都の門門を見たりしならずや。且つ亦我等我等も今は信仰信仰に依りて歩ゆむならずや。率率ざ急ぐべし、彼の鞭鞭を持てる者者再び追ひ付かずとも云ひ難し。げに兄弟兄弟よ、「汝汝哲哲き言言を離れしむる教教を聞くことを息めよ、
 とも在るならずや。之れこそ卿卿より我が教教そはるべき筈筈なるに、却つて卿卿に云ひ諭すと云ふ次第次第なり、兎も角も彼の者者に聞くことを息め、矢張り我等我等は靈魂靈魂の救救ひを信すべきなり」。

基、「兄弟兄弟よ、我が卿卿に此此の間間を掛けたるは、自自から信信ずる處處の眞理眞理を疑疑がひての譯譯にはあらず、實實は卿卿の心心を引きて、其其の中に結結べる正直正直の實實を得て見んと思ひしことなり。此此の人の事事は我れ能く知り、彼れこそ其其の目眩目眩みて此此の世世を拜拜む一人一人なれ。率率ざん、共に進進み行くべし、我等我等は實實に眞理眞理を信じ、また「「誑誑はりの眞理眞理より出出でざること」、をも知ることなり」。

斯く云ひて兩人兩人は彼の男男を離れ行き、彼れは亦彼の兩人兩人を打ち笑ひつゝ、立ち去りたり。

其の時我れ夢夢の中中に見けるに、彼の兩人兩人は進進み行きて遂遂に唯或る土地土地に入りたりしが、是處是處は其其の空氣空氣の所爲所爲にて、おのづから旅人旅人に眠氣眠氣を催催ふさしむる處處なり。されば有望有望は是處是處に來るより頓頓て眠氣眠氣さし、甚く其其の氣氣も緩み果て、堪へ難ければ、基督基督信者信者に向ひて云へるやう、「あはれ我身我身は最最と懶氣懶氣になりて、今は目を開けても居られぬ程程なり、暫し此處此處に休休みて一睡一睡りすること、せん」。

基、中々中々思思ひも寄寄らず、恐恐らく眠りたらば何時何時までも醒醒むること
 は無無からん」。

有望有望、「兄弟兄弟よ、そは又何故何故ぞや、およそ疲れし者者に取りて睡眠睡眠ほご心地心地よき者者はなく、我等我等も唯だ一一と眠りせば、大き大きに元氣元氣を得ることなるべし」。

此の段に於ては、先づ其の心を清くし、神の御霊を感得せしむべきことなり。其の心を清くし、神の御霊を感得せしむべきことなり。其の心を清くし、神の御霊を感得せしむべきことなり。

基、「あはれ彼の牧羊者等の一人が、妖幻の土地にて用心せよと云ひ付けしを、卿は忘れも爲ざるならん。彼の者の思はくは是處の事にて、『されば我ら他の人の寝るが如く寝ることをせず、醒めて慎しむべし』、とある通り、我等が眠らんことを用心せよと云へるなるべし。」

有望、「我れ今身の過失を合點したり、若しや唯だ一人なりしならんには、忽ち是處に打ち眠りて滅亡の難をも冒すべかりしを、さては賢き人の古諺に、『二人は一人に愈る』、と云へる意も能く解りたり。我身は卿の道連れにて今まで情を蒙むりしことなるが、卿は必らず其の勞苦の爲めに善き報いを得らるゝなるべし。」

基、「さて此の惰氣を防がんため、之れより威勢よき談話を始むべし。」
有望、「そは此上なき思ひ付きなり。」

基、「さらば何から始めんか。」

有望、「先づ神が我等に始め給ひしことより始むべく、兎もあれ何卒卿より始められよ。」

基、「我れ先づ此の歌を歌ふべし、

「世の愛き旅に心倦み

氣も倦み果て、道芝の

露や臉の重き時。

來れ、來りて斯く語る

聖き談話に目を醒ませ。」

其時基督信者は言葉を繼ぎて云ひ出でけるやう、「我れ卿にひとつの事を問ふべし、抑も卿は最初如何なる考がへより、現在のやうに行なはるゝことゝなりたりしぞや。」

有望、「さては我が靈魂の爲めに善き事を求め初めたる仔細なりや。」

基、「それなり、其の事なり」。

有望、「我身は久しく我が市場の見せ物、賣り物などに心を悦ばすことを爲たりしが、今となりて考がふるに、我身もし斯かる物を長く慕ひたらんには、必らず其れが爲め滅亡に沈み果つべかりしなり」。

基、「其の物と云ふは如何なる類ひなりけるぞや」。

有望、「されば、在らゆる世の財また富の類、さては又放蕩、放食、放飲、蕩言、また虚を吐くこと、不潔なること、安息日を守らざること、其の他何にまれ靈魂を滅ぼすに足らん程の者は、悉皆く我が悦びとせしことなり。されど實に卿の云はるゝこと、並びに彼の敬愛する忠信ごのが、其の信仰と善き行爲の爲めに、浮華の市場にて命を落されし始末などを考がへ、終に「是等の事の果ては死なり」と云ふこと、及び「神の忿怒は是等の事に依りて背逆者に至る」べ

●羅馬六
十一、二十一、二十二

きを悟りたり」。

基、「さて卿は其の悟りに連れて直ちに悔い改むることを爲られしや」。

有望、「いや、我身は罪の害悪や、また其れを行なふに伴ふ刑罰などに就きては、直ちに之れを知ること欲はず、實は我が心に神の言葉の入りて感動し始めける時は、却つて心の目を閉ぢて其の光りより背かんとせし位なり」。

基、「さて、神の妙へなる聖靈が、始めて卿の上に働らきたるに、斯くも之れを待遇はんと爲られし理由は如何にぞや」。

有望、「それには種々の理由あり、第一に、我身は之れが神の働らきなるとは一尙に知ることなく、げにや神が罪人を悔い改めさせ給ふには、先づ其の罪を知らしむるより始め給ふことを悟らざりけるなり。第二に、罪は我身に取りて最とい猶ほ捨て難く、極はめて味

はひ好き者に思ひけるなり。第三に、昔し馴染の人々と離れんこと遣る瀬なく、あはれ長く共に居て共に樂しまんことを欲ひけるなり。第四に、我が始めて罪を悟りたりし時、心忽ち悶え苦しみて其の煩らはしきこと堪へ難く、げにや其の事を思ひ出づるさへ最と堪へ難かりけるなり。

基、「まかし又時には其の苦しさを忘るゝ事も在りつらん」。

有望、「さなり、時には其の事なきにも在らねど、やがて再び心に浮び來り、さては前にも増して悪しく悪しく彌や悪しくなることなり」。

基、「さて、如何なることより再び其の罪を心には思ひ浮ぶるならん」。

有望、「それにも種々あり、先づ、(一)、途中にて善人を見たりなどする時、(二)、他人の聖書を讀めるを聞く時、(三)、我が頭の痛き時、

(四)、隣り人の誰れか重き病に罹れりと聞く時、(五)、葬式の鐘の響き聞こゆる時、(六)、己れも遂には死ぬることを思ふ時、(七)、他人に不慮の事起りて俄かに死にたりと聞く時、(八)、別けても我身自からを顧りみて、やがて審判に曳かるゝを思ふ時などに其の事あるなり」。

基、「さて何時にてもあれ、斯かる事の孰れか卿の上になる時、心安らかに罪の咎めより脱かるゝこと叶ひしや」。

有望、「いや、迎も叶はず、そは其の時我が良心は益ます其れが爲めに緊しく捕らへられて如何ともし難く、さればとて再び舊の罪惡に歸へり行かんかと思へば、(元より我が心は全く其の積りは無かりしとするも)、其の思ふ丈けにても一入心配を増したることなり」。

基、「さらば何とか爲られしぞや」。

有望、「兎も角も身の行爲を改たむるやう勉むべしと考がへたり、さもなれば必らず天罰を受くるならんと思ひしなり」。

基、「さては改たむるやう骨折られしや」。

有望、「さなり、斯くて我が罪惡のみならず、また罪惡深き仲間よりも遁れ、祈ること、讀むこと、罪の爲めに泣くこと、隣人に眞理を證することなど、單へに宗教の務めを行なひたり、斯かる事は其の他にも種々爲しつれど一々には述べ難し」。

基、「其時卿は心よしと思ひけるにや」。

有望、「さなり、それも唯だ一時にて、やがて憂苦は再もや我が上に攻めかゝり、而も我が改ためたる行爲の故に著じるしく憂苦を覺えたり」。

基、「そは亦如何なる仔細ならん、既に其の惡を改ためたる上からには、愛ふる筈も無かるべきに」。

有望、「いや、之れにも種々の仔細あり、別けても『我等の義はこどく、汚れたる衣の如し』律法の行爲に依りて義と爲らるゝ者な

①以賽亞
六十四ノ
六十六、二
加拉太二
ノ十六、七
ノ路加十七

し』汝等命せられし事を皆な行したる時も、我等は無益の僕なりと云へ。其の他斯かる意味あひの處を讀むにつけて、おのづと憂苦を催ふすなり。是等の事より道理を推して自から思ひけるやうは、若し我等の義しきこと凡て汚れたる衣の如くあらんには、また若し律法を行なふことに依りて、誰れも義しと爲らるゝ者無からんには、さては亦、若し我等すべての事を行なひて、矢張り無益の僕ならんには、それこそ律法の誠しめを守りて天に行かんと望むこと唯だ唯だ愚の至りなるべけれど。猶ほ亦考がへけるは、若し人ありて或る店屋より千圓程の掛借りを爲し、其の後ちは一々現金にて買ひたりとせんに、元より舊き借金の帳消しとなり居らぬ以上は、店の主人必らず之れを訴へて、終には其の支拂ひの済む時まで牢屋に入れらるゝ次第ならん」と。

基、「さりとは、如何に卿と其の事を比べ見たりしぞや」。

有望、「さればなり、我身は自からに引き比べて斯く考がへたり。抑も我れは己れの罪惡に依りて神の帳面に莫大なる債を記入せり、さるからに今身を改めたりと云ふとも、到底も其の負債を果たさんこと思ひも寄らず、斯くては今の通り行爲を正しく爲したりとて、如何で我が舊惡を償のひ、また其れに依りて自から招きたる未來の刑罰を脱かるゝことを得べきと」。

基、「そは申分なき譬へ方なり、さて其の次は」。

有望、「其の次に、我身が行爲を改めしより此の方、常に身を苦しめたる心配と云ふは、今我が行なへる最も良き事に就きても細かに心を留めて見れば、矢張り其の中に潜める罪あり、げにや新らしき罪の其の善き行なひに混り居ることなり。されば我れは全く善き者になりたり義しき者になりたりと自慢するには似も付かず、また假りに昔しは過失なかりし身なりとするも、實は今更ら日毎に行な

ふ事こそ、却つて身を地獄に送るに足るの罪なれと思ひける程なり」。

基、「其時卿は何と爲されしぞや」。

有望、「爲したりとや、實は爲す處を知らざりけるなり。幸ひにも彼の忠信とは元と知り合ひの仲なりしかば、之れに我が心を打ち明けしに、彼れは我身を教へて、まことに身を救はれんとならば、自身の義も、在らゆる世の中の義も其の甲斐なく、唯だ一度も罪を犯せしことなき人の義を受くべき筈なる由語りたり」。

基、「卿は其の云ふ處を眞實なりと思はれしや」。

有望、「若し我が自から改めたることに満足して喜こび居る時、かゝることを聞かされたらんに、或ひは彼れの意添へを愚かなりと笑らひも爲つるならんが、兎に角今は自身の腑甲斐なく、且つ罪惡は我が最も善き行爲にさへ纏はり居るを悟りしより、餘儀なく其の云ふ處に傾むきたり」。

基、「最初彼れが其の事を卿に云ひ出でしとき、卿は世にも斯かる類ひの人ありて、此は一度も罪惡を犯したること無き者なりと、憚かる處なく云ひ得らるゝ程の人物あるべしと思はれしや」。

有望、「打ち明けて云は、最初は其の言葉こそ怪しくも聞こえたり、されど暫らく彼れと交らひ語らふ程に、充分其の事を合點したり」。

基、「さて卿は其の人が如何なる方にて、また義と爲らるゝには何故其の人に依るべきかをも尋ねられしや」。

有望、「尋ねたり、其時彼れ我身に告げて、それこそ至尊者の右に坐し給へるイエス君なる由を語り、また我が義と爲られんためには、主が此の世に在せし時親しく行されし事や、また十字架に懸りて痛苦を受けられし事をも信すべき筈なりと云へり。猶ほ亦我れ彼れに向ひて、其の方の義が神の前に他の人をも義しくするの功德あり」。

四章、馬書
哥羅西書
希伯來書
十得後書
一彼得後書

とは、如何なる仔細ならんと尋ねしに、彼れ又我れに告げて、抑も主は大能ある神に在して、其の行なはるゝ處を行なひ、且つ彼の死をも遂げ給へり、されど之れ皆な御自身の爲めには非ずして我等の爲めにせられたり、されば主を信するに於ては、其の行されしことも又其の行爲の功德も皆な我等の上に歸せらるべしと云へり」。

基、「其時卿は何と爲られしぞや」。

有望、「我身は主が此の身を救ふことを悦び給ふまじと思ひしかば、我が信することに故障を述べたり」。

基、「さて忠信は何とか云ひたる」。

有望、「されば、彼れは兎も角も主の許に行きて見よと命じたり、其時我れ彼れに向ひて、それこそ推參の沙汰なるべけれど云ひしに、彼れは然ることあらず、我身は既に其の招きを受けたる者の由を云へり。彼れは亦一個の書物を我身に與へしが、此はイエスの口づか

八、馬書
一、二十

●馬太五
ノ全二八、
五ノ三十四

●詩九、十
ノ利米亞
五ノ九、十
●二、九、十
ノ耶米亞
三ノ十
●一、十
ノ但理十
●二、十
ノ出埃及
●二、十、五
ノ利未、五
●一、四、五
ノ希伯來、四

ら授けられしことを記せし者にて、其の一點一畫も堅く立ちて動かさるゝことなく、天地は廢するとも廢せまじき由を告げ、之れに依りて遠慮なく主の許に行くべしと勵ましたり。其の時我れ彼れに向ひて、我れ行かば如何に爲すべきと尋ねしに、彼れ云ふ、先づ天父の前に跪まづき、心を盡し精神を盡して、何卒主を示し給はれと願ふべしと。されば我れ重ねて、如何にして其の願ひ事捧ぐべきやと尋ねけるに、兎も角も行けかし、かくて神が恩寵の座に在し給ふを見ん、げにや神は長しへに其處に在して、來る者に罪の赦しと憐憫とを與へ給ふなりと云ふ。我れ亦彼處に行きても何と云ふべきかを辨まへすと云へば、彼れは此の様に云ふべしと云ひ含めたり。「神よ罪人なる我れを憐れみ給へ」また「願はくばイエス、キリストを知りて之れを信することを得せしめ給へ。げにや其の義と之れに依る信仰なくば、我身は全く滅ぼさるべきに、あはれ主よ、主は慈愛

深き神に在まして、御子イエス、キリストを世の救主に立て、且つ之れを我身の如き淺ましき罪人の爲めに惜しみなく與へ給へりと聞く。(あゝ實に我れは罪人なり)、さらば主よ、今此の時を失なはず恩恵を増し、御子イエス、キリストに依りて我が靈魂を救はせ給へ、アーメン』と。

基、「さて卿は云ひ付けの通り爲られしや」。

有望、「さなり、繰り返へし、繰り返へし、また繰り返へしても之れを爲せり」。

基、「かくて天父は其の御子を卿に示めされしや」。

有望、「初めにも、次にも、三度目にも、四度目にも、また五度目にも、げにや六度目にも竟に示めさるゝことはあらざりけるなり」。

基、「さらば何とかが爲られしやらん」。

有望、「何とかがとや、さて、何とも爲ん方なかりしなり」。

基、「寧ろ祈りを休めなんかと思はれし事は無かりしや」。

有望、「げに其のこと幾百遍なりしや云ひ難き程なり」。

基、「さて、全く休められざりしは何故ならん」。

有望、「我身は前に語られし事の眞實なるを信じ、全く此のキリストの義に依らずば、世に誰れ在りて我身を救ふ者もあるまじと信せしかば、心ひそかに思ひけるやう、今にして祈りを休めなば必らず亡ぶべく、逆ても亡ぶべくは責めて恩寵の座にて死なんと、また「若し其の黙示運からば待つべし、そは必らず滯滞ほることなく臨むべければなり」と在るをも思ひ浮べたり。さるからに我れ祈ることを續け、漸やくにして天父の其の御子を示し給へるを待ち得たり」。

基、「さては如何様にか示めされしぞや」。

有望、「元より肉躰の眼には見られざりしも、悟りの眼にて主を見たり、さて其の次第と云ふは之れなり、或る日我れ甚く悲しみを催

ハバ谷

以弗所

便徒行

哥林多

約翰六

ふし、げにや生れて此れ程の悲しさはあるまじと思ふ斗り、而も其の悲しみは身の罪の重く且つ悪しかる事を鮮やかに見とめたるより起りしにて、さては唯だ打ち沈みて吾が靈魂の限りなき刑罰を受くべき事と、地獄の事のみ思ひ積くる折しも、忽ち天より聲ありて、「主イエス、キリストを信せよ、さらば汝救はるべし」と云ふにつれて、

主イエスが我身の上に臨み給へるやう覺えたり。

其時我れ答へて、「あゝ主よ、我身は最と淺ましき、實にや最とも最とも淺ましき罪人なり」と云ひしに、主は我れを顧みて、「我が恩なんちに足れり」と云ひ給へり。されば我れ又主に向ひて、「されど主よ、信ずると云ふは如何なることなるべき」と云ふに、「我れに就る者は餓えず、我れを信する者は恒に渴くことなし」と云ふ聲聞こえて、おのづから就ることゝ信することの一つなる趣むきも覺られしかば、最と嬉しくて坐に感涙を催ふしたり。我れ亦重ねて、「主よ

さるにても我身の如き斯かる大罪人も猶ほ能く主の許容を得て、救はるゝことも叶ふべくや」と云へば、「すべて我れに就る者は我れ必らず之れを棄てず」と聞こゆ。我れまた、「主よ、さりとは主の御下に就りて我が信仰を正しく主の上に置かんため、主の事を如何に思考へて宜しきや」と問ふに、其時また聲ありて、「キリスト、イエズ罪人を救はん爲めに世に來れり。彼れは凡て信する者の義とせられんために、律法の終りとなれり。彼れは我等が罪の爲めに殺され、また我等が義と爲られん爲めに甦がへされたり。彼れは我等を愛し、其の血を以て我等の罪を洗ひ潔めたり。彼れは神と人との間に立てる中保者なり、また彼れは我等の爲めに懇求さんとして恒に生くるなり」と云ふ。是等の意を汲みて、我れは主の中にある義を慕ふべきこと、及び主の血によりて充分に我が罪を潔めらるべきこと、また主が天父の律法に従がはれ、其の刑罰に服せられしは、全く御自身

の故にはあらで、實に其の救拯を受けて感謝する者の爲めなりしことなごを悟りたり。さるからに我が心は喜悅にて充ち、我が眼は涙にて満ち、我が情はイエズ、キリストの尊名と、其の民と、其の道の愛に焦れたり。

基、「それこそ實にキリストが現はれて卿の靈魂に臨まれたるなれ。爰て其れが爲めに卿の精神は如何になりしや、猶ほ細やかに語られよ」。

有望、「されば、之れに依りて我が心開け、先づ世間の義は悉皆く數ふるに足らずして滅ぶべき状態なるを知り、また天父なる神は最と義しく在ませども、猶ほ罪人の就るを拒み給はずして、正しく之れを義しき者と爲らるゝことを知り、また之れに依りて我が前の生涯の悪しかりしを甚く耻ぢ、己れの愚昧なりしを思ひ知りて愈よ耻ぢ入りたり。げにや現在と云ふ現在までイエズ、キリストの斯く

斗り麗はしく見えたることは思ひ寄らざりしなり。また之れに依りて聖き生涯を慕ふやうになり、且つ主イエスの尊名の爲め、其の榮光の爲め何事をか爲さばやと願ふやうになりたり。實に「我が躰に千斛の血しほありとも、悉皆く主イエスの爲めに濺ぎ盡して惜しまじと思ひたり」。

斯く語りて行く程に、有望不圖後ろの方を打ち見やりて、かの愚味の従がひ來るを見出で、けり。

第十程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春をしぞ思ふ

さる程に、我れ夢の中に見けるに、彼の有望振り返へりて、曩に

後に残したる愚味の従がひ來るを見てければ、彼れ基督信者に向ひ云ひけるやう、「あれ、見られよ、迢か後れてウロ、來るは先刻の若者ならずや」。

基、「げに、彼の者なり、彼は我等の道連れを欲はぬやうなり」。

有望、「あ、今まで我等と一所に歩みたらんには、必らず益を受けたることも有りつらんを」。

基、「實に云はる、通りなり、玄かし彼れは亦彼れなりの考へを有てるに相違なし」。

有望、「それに相違なからん、さり乍ら兎も角も待ち合はせてやるべきか」(と云ひつゝ、兩人は待ち居たり)。

やがて基督信者は彼の若者に聲を掛けて云へるやう、「もし、早く來られよ、何とて左のみ遅延はるぞや」。

愚味、「我れは獨り歩くことが好なり、げに甘合の連とならずば、

此の方が遙かに勝しなり。

基督信者は之れを聞きて有望に向ひ（まかも聲を潜めて）云へるやう、「彼れは我等の道連れを欲はずと我が云ひつる通りならずや、然り乍ら」と云ひさして言葉を継ぎ、「是處は處も物寂しければ、鬼も角も之れを伴なひて、談話に徒然を紛らすべし」と云ひつゝ、愚昧の方に振り返へりて、「さて如何にや、神と卿が靈魂の間柄は今如何にぞや」と云ふ。

愚昧、「宜き積りなり、我れは常に善良なる思想をもて充たされ居れば、獨り行く行くも我が心は慰さめらるゝなり」

基、「其の善良なる思想とは何ならん、願はくは聞かされよ」

愚昧、「されば、神と天の事を思ふことなり」

基、「思ふ丈けならば悪魔も悪黨も能く爲るなり」

愚昧、「されど我れは之れを思ひ、又之れを慕ふなり」

① 福音十
三ノ四、
全ノ二八、
六ノ二八

基、「それとても『惰たる者は心に慕へども得ることなし』、とある通り、多く及びもつかぬ者さへ爲て見ることなり」

愚昧、「されど我れは之れを思ひ、且つは之れが爲めに一切を捨てたり」

基、「そは受け取り難し、抑も一切を捨つるとは極はめて容易ならぬことにて、實に多くの人の考へも及ばぬほど難かしきことなり。そは鬼もあれ、卿が神と天の爲めに一切を捨つるに至りしは何故にて、また何に依り斯く思ひ立たれしや」

愚昧、「自己の心まかせなり」

基、「さりとは、賢き人の箴諺に『おのれの心を恃む者は愚昧なり』、ともあるならずや」

愚昧、「そは悪しき心に就きて云へるなり、されど我が心は善良なり」

基、「何として其れを知らるゝや」。

愚昧、「天の事を望みて我れを慰さむること其の證據なり」。

基、「あゝ夫れとても心の詐偽に依ることならん、げに人の心は得て望むべき土臺も無き事を望ませて、其の人を悦ばさんとする者なり」。

愚昧、「我が望には確と土臺あり、乃はち我が心と行爲の能く符合ふことなり」。

基、「卿の心と行爲が能く符合ふとは、また誰れに依りて知られしぞや」。

愚昧、「それも己れの心まかせなり」。

基、「それも卿の心まかせとや、さてく、「己が眼は杓子、他人の眼は定規」と云ふことあり。斯かる事柄には尋常の證據一とつとして値打ち無く、唯だ神の言に依りて證しすべきなり」。

愚昧、「されど善き思想を懐くは善良なる心ならずや、また神の訓戒を守るは善良なる行爲ならずや」。

基、「それは云ふまでもなく、善良なる心は善き思想を懐き、また神の誠しめを守るこそ善良なる行爲なれ。されど斯く思ふ斗りと、また實際斯く在るとは、全く一とつ事にあらず」。

愚昧、「さて卿は如何なる事を善良なる思想、また神の訓戒を守る行爲なりと思はるゝや」。

基、「されば善良なる思想と云ふにも種々あり、先づ自身のこと、神のこと、キリストのと、また其の他のとに關はるなり」。

愚昧、「自分自身の事に關はる善き思想とは如何なる者ぞや」。

基、「神の言に符合ふ類ひの者なり」。

愚昧、「自分自身に就きての思想と、神の言と相合ふとは如何なる次第ならん」。

①羅馬三ノ詩十四ノ三、二、一、三、五、創世六

「我等が自身に就きて量る處と、神の言の量る處と相違はぬことなり。たとへば、生れつきのまゝなる人間に就きて、『世に義人なし、善を行すものなし』、また『人の心の思念の都て圖る處は恒に悪しきことのみなり』、また『人の心の圖る處は其の幼なき時よりして悪しかるなり』、など云はれたる神の言を取り、さて其の意味合を味はひて、自分の身も其の通ほりなるを思ひなば、乃はち神の言と我等の思想と符合ひたるにて、それこそ善良なる思想とも云ふべきなれ」。

愚昧、「我が心の斯くまで悪しき者とは信じ難し」。

「基、」さればこそ、卿は自分の事に就きては今まで一度だに善き思想を持たざるなれ。それは兎も角もとして、さて神の言は我等の心を量る如く、亦我等の行爲をも量るなり、さるからに心と行爲とに就きて其の言の量る處と、また我等自からの考がふる處と同じから

ば、之れ乃はち相符合へるにて、甫めて善良なる思想なり」。

愚昧、「その意義を説き明かされよ」。

「基、」されば、神の言に人の道は曲れる道にて、善なく唯だ逆戻れり、また人は生れながらにして善き道を知らず、自づから之れを離れたり、など云へる意味合の者あり、さて人ありて自身の行なふ處が其の云へる通りなりと思ひなば、それも謙遜りて眞面目に其の通りなりと考がへなば、それこそ神の言の量る處と其の考がふる處と相符合へるにて、全く其の行爲に就きての思想は善良なりと云ふべきなり」。

愚昧、「次に神に關はる善き思想とは如何ならん」。

「基、」之れ亦、自分に關はること、同然、神に就きて其の言の説く處と、我等の考ふる處と相符合ふ類ひの者なり。乃はち神の在し給ふ事や其の性質などに就きて、其の言の教ゆる通り我等が考がふる

①詩百二ノ五、五、十、羅馬三ノ七、三、十

ことなり。先づ其の性質の事などは一朝一夕にも語り難ければ、假りに神と我等の間柄に就きて云はんに、神は我等が我等自身を知るよりも、迢かに能く我等を知り給ふこと、されば我等自から罪無しと思ふときも、神は猶ほ我等の中なる罪を見給ふこと、また神は我等の隠れたる思想を知り給ふことや、我等の心の奥深き處も常に神の目に表はなること、さては亦、我等の義も悉く悪しき者に似て神之れを堪へ給はず、縦し我等有らん限りの善き行爲を頼みて其の前に立つも、神は必らず其の尊顔を背むけ給ふべきこと、我等若し以上の如く神に就きて考がへなば、其は先づ正しき思想なりと云ふべきなり。

愚昧、「我れとても左程の馬鹿者にあらず、神が我れよりも迢かに能く見給ふことや、また我が最も善き行爲も神に近づくの頼りとならぬ位は考へて居るなり。」

基、「さらば如何にせば宜しきや。」

愚昧、「元より云ふ迄もなく、義とせられん爲めにキリストを信ずべしと思ふなり。」

基、「それは珍らし、卿はキリストの必要を見とめざるに、猶ほ之れを信ずべしと思はるゝよ、且つ卿は生れつきのまゝなる罪をも、また現在の缺點をも知らず、而も卿が自分の事と、其の爲す事に就きて云ふ處を聞けば、丁度或る人の我れはキリストの身代はりに依らずとも神の前に義と爲らるゝなりと云ふ類ひに宛も似たり、それでも矢張りキリストを信ずると云はるゝや。」

愚昧、「何は何でも充分信するなり。」

基、「如何やうに信せらるゝや。」

愚昧、「されば、キリストが罪人の爲めに死なれしこと、並びに主の誠しめを守らば其の恩恵を蒙るに依りて、神の前に凡ての呪咀

より救さるゝことを信するなり。乃はちキリストは其の功徳を以て、我が爲め神の聖旨に適ふやう、宗教の務を盡し置かるゝにより、我れは必らず義とせらるべきなり」。

基、「いで、卿が斯く告白せる其の信仰に就きて、我が意見を述べて見るべし。

第一、卿の信する處は空想の信仰にて、斯かる信仰は神の言に記されたる處一とつも無し。

第二、卿はキリスト御自身の義に依りて救さるゝことを取りて、直ちに自分の義に依ることゝ爲るが故に、卿の信する處は偽はりの信仰なり。

第三、斯かる信仰に依れば、キリストは唯だ人の行爲をのみ救して、實は其の人を救さず、よし又其の人を救すとするも實は其の行爲の爲めに救す者となることなり、之れ乃はち間違ひなり。

第四、されば此の信仰は恃むに足らず、斯かる者に依りては末日に全能なる神の忿怒を脱かれんこと叶ひ難し。げにや義とせらるる眞の信仰は、先づ人の靈魂が律法に依りて望みなき境遇に在るを感ずる餘り、一と時も早くキリストの許を避難所と頼み、其の義によりて靈魂を完うせんと慕ふ者なり。(抑もキリストの義と云ふは、人の行爲を神の聖旨に適はしめ、従がつて救しを得させんとする恩恵の業にはあらず、實は躬親づから律法を守られ、全く我等の身代はりとなりて、我等が受くべき筈なる苦難をも受け、我等が爲すべき筈なる事をも爲されし次第なり)、されば此の義こそ眞の信仰の頼む處にて、其の袖に掩はれ其の蔭を蒙りて、甫めて人の靈魂も神の御前に汚れなき者として現はるゝことを得、かくて容されて刑罰を脱かるゝなり」。

愚昧、「何と云はるゝぞや、卿はキリストが御自身に爲されし事を

猶ほ我等の爲めに爲られたりとして之れに頼らんと云はるゝにや。かかる慢心こそ心の慾の手綱を弛め、さては人に放埒氣儘を許すことなるなれ、げにや若し信じさへすればキリストの身代はりに依りて救さるべしとせんには、如何なる行爲をなしたりとして構はぬ筈ならずや」。

基、「あゝ愚昧とは卿の名ならずや、まことに卿は其の名に背かぬことを云はるゝなり。さても卿は義に依つて救さるゝことの何たるを知らず、また其の信仰に依りて甫めて神の烈しき怒りを脱かれ、其の靈魂の安全を得る事をも知らず、げにや亦、此のキリストの義を信仰することは、實に救ひの功驗あり、自づからキリストによりて心より神を仰ぎ慕はせ、従がつて其の尊名、其の聖言、其の道、また其の民を愛さしむるに至る者にて、卿が愚昧にも想ひ圖る如き者には非ることをも知らざるなり」。

有望も其時基督信者に言葉を添へて云へるやう、「先づキリストが何時か天より其の人に現はれ給ひしこと有りや無しや尋ねて見られよ」。

愚昧、「此は如何に、卿等は其の様の事を云はるゝにや、およそ卿等に限らず、誰れにもあれ、神が現はれ給ふなど云ふ人々は、大抵其の頭腦の狂ひ居るやう思はるゝなり」。

有望、「そは又何たる事ぞや、抑もキリストは神の中に隠れ居給ひて、おのづから肉の眼には見え給ふべくもあらず、誰れにもあれ充分に知らんことを願はひ、是非とも父なる神の示し給ふを待つべきなり」。

愚昧、「そは卿の信仰なるべけれど、我れは然らず、我が信仰とてもおさく、卿等に劣るべきかは、而かも我れは卿等ほどの空想は我が頭に持たぬなり」。

基、「我れに一言を許されよ、さても此の事柄に就きては斯く輕々しく云ふべき者にあらず、まことや我が良き同伴の存分に説かれたる如く、およそ天父の示しに依らずば誰れとてイエス、キリストを知ることを叶はず、げにや亦、靈魂をキリストに委ねまつる信仰とて、(若し義しき者ならば) 必らず神の大なる能の感動に依るべき筈なり。されど愚昧ごのよ、卿は其の信仰の感動と云ふに就きても、また愚昧なるやう見受けらる、さらば速やかに目を醒まし、自身の淺ましきを悟りて、主イエスの許に急ぎ往かれよ、かくて其の義(主御自身は神にて在ませば) 乃ち神の義に依ることを得ば、市めて刑罰より救はるべし」。

愚昧、「さて、卿等は足早やにて、我れは到底も連れ立ち難し、行くならば前に行かれよ、我れは暫らく止まるべし」。

其時彼の兩人の歌ひけるやう、

「眞實の忠告幾そ度

聞くべき時に聞かざれば

悔いて返へらぬ悔いあらん、

やがてぞ廻ぐる世の末の

滅亡の淵に沈むとき

身の愚昧をも思ひ知らなん」。

斯く歌ひて基督信者は其の同伴に向ひ、「さらば偕て、有望ごのよ、我等は復たもや兩人ざりにて行くべしと見ゆ」と云へり。

さる程に我れ夢の中に見けるに、彼の兩人は前に立ちて急ぎ行き、愚昧は又澁々と其の後に従がひたり。其時基督信者は又其の同伴に云へるやう、「げに此の淺ましき男の果ては必らず悪しかるべきに、我身は最ご氣の毒に思ひやらるゝなり」。

有望、「あはれ、我が里には一家を擧り、また一街を擧り、さ

ても都詣での旅人の中にすら、斯かる有様と成り果て居る者夥多し
くあり、我等の地方にてさへ斯く多かる程ならば、況して彼の者の
生れし處にては如何斗りなるべき」。

基、「まことや『彼等目にて見、心にて悟り、改ためて醫やさるゝ
ことを得ざらんために、主その目を醫くし、其の心を鈍くせり』と
あるは此の類ひを云ふなるべし。

さて今は我等の外に人も無ければ、互ひに遠慮なく語るべきが、
先づ卿は斯かる人々に就きて如何やうに考がへらるゝや、彼等は逆
も其の罪を悟ることなく、従がつて其の身の危ふきをも恐るゝこと
あるまじと思はるゝや」。

有望、「いや、卿は年長なれば、先づ意見を聞かされよ」。

基、「さらば我れ語らん、(思ふに) 彼等とても時には其の事なしと
にも非ざるべし、されど彼等は生得愚昧にて、罪を悟ることの善事

なるを知らず、さるからに其の事あるも無暗に之れを打ち消さんと
努め、恣まゝに自分の心を恃みて、我れと我身に諂らふことをする
なり」。

有望、「げに卿の云はるゝ通り、罪を悟るの恐れは人の益となり、
且つ都詣での始めには之に依りてこそ足元も義しく爲らるゝなれ」。

基、「若し其の恐れ正しきものならば全く夫れに相違なし、されば
『神を恐るゝは智慧の始めなり』、とも云ひ置かれたり」。

有望、「さて然らば正しき恐の事は、卿如何やうに説かるゝや」。
基、「正しき恐れ、或ひは眞の恐れは、先づ三つの事に依りて知ら
るゝなり」。

第一、其の起因によりて知らる、乃ち罪を悟りて救ひを求むる
より起る恐れなり。

第二、正しき恐れは人の靈魂を追ひ遣りて、救はれん爲めに之れ

約百三十八ノ詩ノ百一十一ノ九

約翰十
二ノ四

をキリストに委ねしむ。

第三、正しき恐れは人の心に深く神と其の言、及び其の道を敬まふ念を生じ、之れに依りて人の心おのづから優しくなり、また其の道を離れて右にも左りにも向くことを恐れ、且つは神の尊名を汚し、其の平和を破り、聖靈を憂れへしめ、或るは不信者の誹りを招くやうの事などを、堅く恐れ慎しむやうになる類ひなり。

有望、「卿の云はるゝ處いと宜し、我れ其の眞理なるを信するなり。それは借ておき、我等は最早や妖幻の土地を越え了はらんとするにや」。

基、「そは又何故ぞや、卿は此の談に飽かれしか」。

有望、「實に左ることあらず、唯だ道行きぶりに尋ねて見たるまでなり」。

基、「されば、是處を越え了はるには、猶ほ一里足らずも行くべか

らんか、兎もあれ、再た談に返へるべし、さても彼の愚昧者は斯く罪を悟ることが恐れを起すのみにて其の身の益となることを知らず、故に之れを打ち消さんとは努むるなり」。

有望、「如何にして打ち消さんとするならん」。

基、「第一、彼れは斯かる恐れを悪魔の仕業なりと思ふことなり、(其の實之れ神の御業なるなり)、されば斯く思ひ僻むるに依り、之れを直ちに害ある者として拒むなり。第二、彼等は又斯かる恐れが其の信仰を害なふ者と考がふるなり、而かも彼等は淺墓なる者にて、あはれ其實信仰とては少しもなく、却つて斯く拒むことに依りて愈よ其の心を頑くなに爲るなり。第三、彼等は自分合點にて、恐るゝなどのことあるべからずと思ふなり、されば其の恐れの起るときは、強て自分を待みて恐れぬ爲するなり。第四、彼等は斯かる恐れに連れて、おのづと自己流の墓なき信心が打ち破ぶらるゝを見るにより、

力を盡して之れに逆らはんとすることなり」。

有望、「此は我身にも聊さか思ひ當る處あり、實に我身未だ自身の事を知らざりし頃は、矢張り其の通りにて在りけるなり」。

基、「さて之れより愚昧の事は止め、他の有益なる談話を始むべし」。

有望、「それは最も望む處なり、猶ほ先づ卿より始められよ」。

基、「さらば十年前の事なり、其の頃卿の國に唯一時とて一人の熱心なる信者ありしが、卿は其の者を知られずや」。

有望、「知れり、最も能く知れり。彼れは正直の里よりは程遠き不爲躰の里にて、復舊某がしの隣り家に住ひたり」。

基、「其の通り、彼れは復舊とは同じ棟割長屋に住ひしなり。さるにても此の男一時は餘ほど熱心にて、其の頃は必らず其の罪をも聊さか見とめ、また罪の報いの事も知り居たるらしく思はれたり」。

有望、「我身も同様に思ふなり、彼れの許より我が家までは約そ一

里半ばかりの事とて、彼れ屢ば我れを訪づれしが、而も常に涙に咽て來りし程なれば、我れも眞實之れを憐れみて、全く望なき者とも思はざりしなり。されど『主よ、主よ』と呼ぶ者悉皆く望みあるに非すと云ふは誰れも知ることなり」。

基、「彼れ或る時我れに向ひ、今我らが爲るやうに、都詣でを思ひ立ちたりと告げゝるが、俄かに惜命者と云へる者と知り合になりて、終に我身とは遠ざかれり」。

有望、「さて彼れが身の上を語るにつけて、序に斯かる類ひの人々が俄かに後退りする其の理由を詮議して見るべし」。

基、「それは最も有益なるべし、此の度は先づ卿より始められよ」。

有望、「さらば我が思ひ議るところにては、其れに就きて四つの理由あり」。

第一、斯かる人々は其の良心醒むれども、猶ほ其の意志の改たま

らざるより、罪科を悟る恐れの薄らぐに連れて、其の信心も亦息ま
り、さては自づから元の昔しに立ち返へるなり。彼の食傷せる犬を
見るに、其の苦しめる間は食せし物を皆な吐き捨つれど、之れ唯だ
其の胸苦しきが爲めに、(犬に心と云ふ者ありとせば)、それこそ心
ならずも爲ることなるべし。されば頓て其の苦しみ去り、胸も落ち
付かば、元より吐きたりとして其の慾の休むことならねば、直ちに身
を廻らして再た其の物を喰ふこと、かの『犬かへり來りて其の吐き
たる物を食ふ』とある通りなり。抑も彼の人々は其の類ひにて、元
來天國の爲めに熱心なるにはあらず、實は地獄の刑罰を感じ又恐る
る斗りなるにより、其の念ひの冷やかになるに連れて、天國と救ひ
とを望むことも亦冷やかになるなり。従がつて罪科の恐れ消え去る
時は、同じく天國と其の幸福を望む事も絶え果て、終に再び舊の
道に立ち返へるなり。

得彼後
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五

◎箴言二
十五

第二、彼等は意氣地なき根性にて人を恐るゝなり、げにや「人を
畏るゝ者は罟に落ち入る」、ともあることなり。然るからに地獄の火
焔の其の目前にちらつきて在る程は、彼等とても天國を望むこと最
と熱心なるやうに見ゆれども、やがて其の恐怖の聊さか薄らぐ時は、
忽ちにして其の考がへを變ふるなり。乃ち一切を捨つるなどの災
難を冒かさず、(彼等は之れを災難と思ふ)、また無益にして而も遁れ
難き難儀に遇はぬやう爲るこそ賢いからめと思ひて、終に道を離れ
再び世の人に從がふなり。

第三、宗教の道に伴ふ耻辱も、亦彼等には躓づく石となるなり。
げに彼等は生意氣に高ぶりたる者にて、平生宗教の道を賤しむ蔑す
むことなれば、彼の地獄と又來らんとする天罰との感じさへ無くな
るときは、直ちに再び舊道に立ち返へるなり。

第四、罪科と恐怖の事を深く考がふるは彼等の忌む處にて、彼等

は身の淺ましき行末に就きても、先づ行き當らぬ間は其れ迄のことにして、遠く之れを慮んばかるなどは嫌ひなり。最初の程は身の行末をも思ひ知りて、義しき人の如く遁るゝことをもし、従がつて安全にも在るならんが、今も云へる如く罪科と恐怖の考がへを避くるに依り、一旦神の怒りと其の恐れに念取り去らるゝ時は、直ちに悦こびて其の心を頑くなに爲し、また益ます頑くなになるやうの道に立ち返へるなり。

基、一卿は略ほ能く説かれたり、詰まる處其の心と意志の改たまらぬことが落度なり。されば彼等は裁判人の前に立てる重罪人に宛も似たり、震ひ戦のきて眞實心から罪を悔ゆるやうに見ゆれども、詰まりは斬首を恐るゝにて、聊さかも其の犯罪を憎み悔ゆるには非ること云ふまでもなし。されば此の者を許し放ちて自由にして見られよ、彼れは直ちに盗みを爲し、矢張り元の悪黨となるべきこと必定

ならん、去かるに其の意志にして一旦改たまらば、決して其のやうの事は無かるべし。

有望、「さて我身己に理由を語りたれば、卿此度は其の筋道につきて聞かされよ。」

基、「元より悦こびて語るべし、先づ(一)、彼等は神のこと、滅亡のこと、また來るべき審判の事などを、出來る限り忘れて考がへぬやうに爲るなり。(二)、次に密室の祈り、慾を制すること、身を傲しむこと、罪惡を悲しむことなど、すべて私かなる勤を次第々に怠るなり。(三)、次に元氣よき熱心なる基督信者と交はらぬやうに爲るなり。(四)、それより次第に公開の勤にも冷淡になり、説教を聞くこと、聖書を讀むこと、聖き集會に連らなることなどを怠たるなり。(五)、次に善き信者の身の上に就きて穴探しと云ふことを始むるなり、而かも極はめて意地悪く之れを爲し、(實は其の見付けたる他人の

缺點を擧げて、自分が道を捨つることを艶を付けんとするなり。(六)
 次に不品行、不爲躰なる放蕩者などを慕ひ始め、終には之れと交は
 るなり。(七) 次には私かに猥褻なる談などを仕始め、偶ま正直と云
 はる、人にて斯かる談を爲す人にも見付くる時は、其の悦こぶこ
 と限りなく、彼の人さへ此の通りなればと云ひて、愈よ憚からず之
 れを爲すなり。(八) やがて少しづつは表はに罪惡を犯すことを始む
 るなり。(九) 終には全く頑くなになりて其の本性を表はすに至る、
 斯くて奇しき恩寵の業に依りて救はるゝに非ずば、再び淺ましき境
 遇に落ち入りて、長しへに身を失まる者となりぬべし。
 斯く語り續けて兩人は其の道を進みたり。

第十一程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春をしぞ思ふ

さて我れ夢の中に見けるに、今しも兩個の旅人は全く妖幻の土地
 を越え了はりて、ベツラ又の名は結ぶ妹背と云ふ國に着きたり。是
 處は其の空氣最と晴れやかにして心地よく、且つ道筋も正しく其の
 中を通ほりしかば、兩人は其處に休らひて暫らく鬪さを晴らしてけ
 り。げにや是處には百鳥の囀へづる聲絶えず聞こえ、千種の花は日
 毎に地に匂ひ、また班鳩の佳耦呼ぶ聲など別けて床かし。此の國に
 ては夜も晝も日輪照り輝やきて、元より死の蔭の谷を離るゝこと程
 遠く、また大漢絶望の來る虞れも無ければ、懷疑の城などは迎も見

①以賽亞
 六十二
 四十一
 二一
 雅歌二
 二十